異邦の少年　亡国の遺産

あしなが犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異邦の少年　亡国の遺産

【Ｎコード】
Ｎ５８７０Ｃ

【作者名】
あしなが犬

【あらすじ】
死の世界・不浄の大地＜ディス・エンガッド＞を旅するエヴァとヒロは、ある日、空を飛んできた少年・カイに『呪われた街を知りませんか？』と聞かれる。それは二人の退屈していた旅に、刺激的な事件をもたらすこととなる。『東方の天使西方の旅人』に登場している同主人公たちの、１年前を描いた番外編。これだけでも、独立して読んでいただけます。

第一話　フライングベイビー、現る。

僕の目の前には子供がいた。

「僕の名前は、カイって言うの。」

そういって笑った顔は、やんちゃな男の子の顔だが愛らしい。
ぷくぷくの頬、大きな瞳、微笑む唇、どこをどうみても普通の子供に見えるのだが、この子供は一つだけ、大きな謎があったりする。

その謎とは・・・。

「えっと、カイ？今、君どうやって、ここに来た？」
戸惑いながら聞く僕に、カイは元気よく答えたものだ。
「うんとね、お空を飛んできたの！」
そう言って、晴れ渡る空を指差した子供を前に、何となく眩暈（めまい）を感じた僕。

普通、人間は空を飛べないものじゃなかったっけ？

第一話　フライングベイビー、現る。

初めまして、僕の名前はエヴァ。
天使たちに支配された死の荒地、不浄の大地（ディス・エンガッド）を旅し続けるしがない旅人。
この世界には、変な常識があって人間は生まれつき罪人で、この不浄（デ）の大地（イス・エンガッド）で苦しんで生きることが贖罪（しょくざい）であり、天使たちに支配されることが当然なんだって。

まあ、天使に支配されているっていっても、罪深い僕らが入ることの許されない楽園天使の領域に、天使たちは閉じこもっているから見たこともないし、実際はあんまり支配されているという自覚はないけどね。

「エヴァ、水をくれ。」
そう言って横を歩く僕に、憮然とした顔を向けて手を伸ばすのは旅の同行者、流離人という放浪を続ける種族のヒロ。
僕にとっては、世界で一番の理解者だ。
「はい、ヒロちゃん。」
ヒロちゃんに、にっこり笑って僕が持っていた水筒を渡してあげると、ヒロちゃんはピクリと、口元を引きつらせた。
「・・・『ちゃん』は、やめろと言ったはずだ。お前は私が『ちゃん』付けの似合う愛らしい女性に見えるのか。」
低い声、据わる目元。
一見すごい怖そうなヒロちゃんだけど、そんな表情すら慣れ親しんだ僕には全く怖さを感じられない。
「ううん。全然見えないよ。すっごい、怖そうな男の人に見える。」
「それは良かったな。目がわるいわけじゃないらしい・・・、じゃあ、『ちゃん』付けで名前を呼ぶのを止められるな？」
僕が躊躇いもなく首を横に振ると、ヒロちゃんは怒ったまま笑うという器用なことをやってのけて、僕に詰め寄った。
そんなこと、決まってるじゃないか。
僕は飛び切りの笑顔をヒロちゃんに送って言った。

「やだ。」

ガン。

「イダ！」

僕が一言ばっさり拒否すると、ヒロちゃんが僕の頭に躊躇(ためら)うことなく拳骨(げんこつ)を落とし、僕は叫びを上げた。
「ぼ・・、暴力反対！いきなり殴るなんて、ひどいよー。」
「じゃかあしい。どうせ、何度言ってもお前は止める気はないんだから、気を晴らすために殴らせるくらいさせろ。」
確かに、僕は『ちゃん』付けを止める気は毛頭ないけど、だからってこんな風に殴られるのは釈然(しゃくぜん)としないものがあるよ。
恨みがましい目でヒロちゃんを見上げれば、ヒロちゃんがにやりと僕に人の悪そうな笑みを浮かべた。
「・・・。」
これ以上言うと、もっと強い拳骨(げんこつ)がくる。
その笑みを見て、直感的にそう思った僕はそれ以上の言葉を言うことはしない。
ヒロちゃんに口で負ける気はしないけど、こうして力で訴えられると泣き寝入りするしかない僕である。
ヒロちゃんは、僕より大人の癖にまったくもって子供なんだ。

そんな風に今までヒロちゃんとの間に、何度となく繰り返されてきた会話をしてヒロちゃんとじゃれ合ったりと、いつもと変わらない旅を続けていた僕たちであった。
しかし、特に会話もなくなって黙々と不浄(ディス・エンガッド)の大地の乾いた大地を歩き続けていた僕の目に、きらりと光る何かが入ってきたのだ。

「？」

眩しいと感じると同時に何だろうと視線を上げると、晴れ渡る青い空に光る何かがあった。
一瞬太陽かと思ったけど、僕らをじりじりと焼くように照らす太陽

は今は僕らの真上にある。
光は僕らの前方にあって、見間違いじゃなきゃ、段々と大きくなって、こちらに近づいてくるように見える。
「ね・・・ねえ。ヒロちゃん、あれ何？」
僕は横を歩くヒロちゃんの服の裾を引っ張った。
「あれ？」
ヒロちゃんはあの光に気がついてないらしい、面倒くさそうに僕を振り返った。
僕はやっぱり段々近づいてきている光から目を放せずに、ヒロちゃんを掴んでいる手とは逆の手で光を指差して、ヒロちゃんに示した。
「？・・・・・なんだ、あれ。」
ヒロちゃんは僕が聞いたのと同じ言葉を発した。

そして、二人で呆然と空を馬鹿みたいに見上げていた僕とヒロちゃんだったけど、その光が次第に肉眼で何者か確認できる距離になったとき、更なる驚きが僕らを襲った。
光に包まれ空を飛んでいる未確認飛行物体は、なんだか見たことのあるような姿形をしていた。
僕の目が正しければ、あれは・・・

「子供？」

そう、光に包まれているのは間違いなく人影、それも大人の片鱗さえ見せない、小さくて丸い子供の人影だ。

「フライングベイビー？」

それを見てヒロちゃんが妙な命名をしたが、僕は無視した。
ヒロちゃんにネーミングセンスは皆無といっていい。
しかし、どんなにありえないものが僕らの目の前に現れようとも、

それが何事もなく通り過ぎてくれれば、この後、僕とヒロちゃんの間で笑い話になるだけで終るはずなんだけど・・・。

なんと、ヒロちゃん命名・フライングベイビーは僕らの頭上で、ゆっくりと高度を下げてきたのだ。

（大体、ベイビーって赤ん坊だろ？あの子は精々5，6歳くらいだし、この場合はフライングチルドレンじゃなかろうか。）

「天使じゃないよな？」

空を飛ぶ人間なんて、今まで見たことはない。

確かにヒロちゃんの言うとおり、翼のある天使なら空を飛べる可能性はあるかもしれないけど。

「でも、羽なんて生えてないよ？」

天使といえば見たことはないけど、翼があるというのが常識だよ。

「・・・じゃあ、やっぱりフライングベイビー？」

・・・だから、それ何？

そんな風に僕らが馬鹿馬鹿しい会話をしている間にも、子供はどんどん僕らに近づいてきて、そして、僕までの距離3メートルという所に降り立ったのだ。

地上に足をつけた途端、子供を包んでいた青い強い光が霧散（むさん）する。

「こんにちわ。」

愛らしい声が乾いた空気に響いた。

『・・・こ、こんにちわ。』

僕とヒロちゃんは、どもりながら挨拶（あいさつ）を返した。

こんなに近くで見ても、彼の背中に翼は見えない。

どう見ても、何処にでもいそうな子供に見えた。

ただ、不浄（ディス・エンガッド）の大地の子供にしては血色いいし、ぷくぷくしている。

生きるだけで精一杯のこの世界じゃ、子供は皆がりがりで疲れた顔

をしているけど、この子供には、そんな様子は窺(うかが)えない。
一体何者なんだ、この子供。
僕のそう思ったことが、顔に出ていたのか分からないけど、黙り込む大人二人に子供は元気に自己紹介をした。
「僕の名前は、カイって言うの。」
そう言って、笑顔を見せるこのフライングベイビー・カイという名の少年との出会いが、最近マンネリ化していた僕とヒロちゃんの旅に刺激を与えることになるのだが、その時の僕はただただ、空を飛んできたという事実に驚いていて、彼がどんな目的をもって僕らの前に降り立ったかなど考える余裕もなかったのである。

第一話　フライングベイビー、現る。（後書き）

ここまで読んでいただいて、ありがとうございます。
この話は、連載している『東方の天使　西方の旅人』に登場している同主人公エヴァとヒロ（こちらはヒロ視点が主軸です）の一年前を描いた番外編となっています。これだけでも独立して楽しんでいただけますが、もし興味がありましたらそちらも呼んでいただけると嬉しいです。
番外編なので、本編とは違い、不定期でほのぼのと、のんびりと物語は展開する予定です。フライングベイビー（笑）カイをめぐる、エヴァとヒロの物語をお楽しみください。

第二話　泣く子には勝てません。

「『呪われた街』が、どこにあるか、知りませんか？」

名前を名乗った後、可愛らしく舌たらずな感じで問われて、答えられない大人が二人。

揃(そろ)って、乾いた笑顔を浮かべていた。

可哀相だけど、聞かれたところで今のところ、僕とヒロちゃん、二人の頭にあるのはただ一つ。

どうやって飛んできたんだ、フライングベイビーよ！

だけど、邪気のない笑顔の前に何も言えない僕ら二人は、微妙に引きつった笑顔を浮かべるしかない。

なんて言葉を返したらいいか、僕もヒロちゃんも戸惑っていると・・・

グー。

妙に間の抜けた腹の虫が、可愛い子供のお腹でなった。

「・・・・・。」

「・・・・・。」

「・・・てへ？」

思わず無言になって子供を見つめてしまった僕らに、カイは可愛らしく小首をかしげて笑いかけた。（・・・ありがちな、シチュエーションだよね）

第二話　泣く子には勝てません。

不浄の大地(ディス・エンガッド)の荒地の真ん中で、僕らは今ピクニックのように、かさかさな保存食を広げていた。

「わあ！本当に食べてもいいの？！」

そういいながら、カイはもう目の前の食べ物に釘付(くぎつ)けだ。
そんなカイにヒロちゃんは、珍しく愛想良く笑う。（ヒロちゃんは、女子供に弱いんだよね。）
「ああ、どうせ私達もそろそろ食事する予定だったし、子供が遠慮するな。」
・・・僕にはいつも、遠慮を覚えろとか言うくせに。
お人好しのヒロちゃんが、腹をすかせた子供を放っておくことができるわけもなく、なけなしの食料を振舞う羽目になった。
不浄の大地(ディス・エンガッド)じゃ貴重な食料を、見ず知らず、しかも飛んできたという、明らかに怪しげな子供にあげちゃうなんて、ありえない！

・・・僕はそう訴えてみたんだけど、
「だが、あんな小さい子供一人じゃ、食べ物だって採れないだろ？幸い、次の街はすぐそこだし、それに色々話も聞いてみたいしな。」と言って、ヒロちゃんは全く相手にしてくれない。

子供を放って置けないのと、その子供に対する興味で、もうヒロちゃんを止めるものは何もないって感じ。
大体、僕には知らない人にはついていっちゃいけないとか、言い聞かせてるくせに（まあ、言うことなんて聞いちゃいないけど）、これじゃヒロちゃんが子供をかどわかす、超怪しい知らない人だよ。
（・・・この場合は、僕もそうなるのかな？）
ただ、僕的にはもちろん飛んできったいう衝撃に興味はあるんだけ

ど、どうにもこの子供に関わらない方がいいって、僕の第六感が騒いでるんだよね。
因(ちな)みに、こういうカンはヒロちゃんより僕の方がよく当たるんだ。
ヒロちゃんは、貧乏くじを引いて、後々後悔しまくるタイプだから。
（本人は否定してるけど）
その僕がやめとけって言っているのに、この不幸体質のお人よしは、最近退屈だったからって、目の前の面白そうなネタに夢中なんだ。

・・・もう、後で後悔してもしらないからね！

「それで、カイはどうやって飛んでたんだ？親はどこにいるんだ？」
とりあえず、ヒロちゃんが聞いたのは、興味が先立ち、その後にカイの身元確認。
カイは、別に隠すことなく食べ物に食いつきながら、子供っぽい言葉で一生懸命話してくれた。

まずは、どうやって飛んでいたかだけど、聞いてみれば種のある魔法だった。
それは、ヒロちゃんが今興味深く眺めている、カイの細い足首に重そうに付いている足輪が二つ。
これを使えば、誰でも空が飛べるらしい。
「うんとね、ちょっと練習するけど、お兄ちゃんたちでも使えるよ？遊ぶ？」
しかもカイはそんな風に聞いてい来る。
ヒロちゃんは結構乗り気だったけど、僕は丁重に辞退した。
そんなアイテムがあるなんて話は聞いたことないけど、人が色々な町を行き来するだけで、命がけの不浄(ディス・エンガッド)の大地で、僕やヒロちゃんが行ったことのない場所などごまんとあるんだ。
聞いたこともない、知らないことがあったって、何ら不思議なことはない。

ただ、現実に目にしたことだけは確か。
カイはこの足輪を使って飛んでいたことは、現実ってだけの話だ。
しかも僕だって、不思議アイテムっていう意味じゃ、ヒロちゃんからもらった、僕の指に嵌(はま)っている指輪だって、同じようなもんだ。
だって、これ瞬間移動ができるという品物なんだ。（これについては、また今度披露するよ）
空を飛ぶより、ある意味こっちのほうが、不思議だし、魔法っぽいよね。

だから、空を飛んできたっていうことについては結構簡単に片付いたんだけど、問題は親についての話だった。

「お父さんはもういないよ。お母さんはね、僕をまってるの。」

『・・・・。』
なんというか、意味を測りかねて僕もヒロちゃんも黙り込んだ。
だけど、ヒロちゃんはすぐに立ち直ると、
「そうか。そうか。」
と言いながら、カイの頭をわしゃわしゃと撫(な)でてやる。
だけど、あの顔は何て言葉を返そうか思案している顔だ。
カイのほうは、ヒロちゃんに構われて嬉しそうな悲鳴を上げている。
（この子は、本当に人懐っこい子供である。いや、この場合はヒロちゃんとカイが相性がいいだけなのかな？）

それにしても父親がいないとか、母親は待っているとかリアクションをとるにも、その意味をはっきり理解するにも、何ともカイの発言は微妙だよね。
僕は戯(たわむ)れる二人を無視して声をかける。

「ねえ、カイ。」
「なあに？」
僕を見上げるカイは、白い肌、黒目がちな大きな目、さらさらの黒髪と、ほんっとにラブリー。
ううん。ヒロちゃんじゃなくても、これはめろめろかも？
子供の愛らしさって、罪だよねぇ。
「お母さんが待ってるって言うのは、さっき言っていた『呪われた街』で待ってるの？だからそこに行きたいのかな？」
そう、空から降りてきたカイは挨拶をすると、まずはじめに僕らにそう聞いてきたのだ。
何でも、空を飛び続けて『呪われた街』というのを探しながら、場所が分からないから、空から人を見つけては僕たちの前に現れたように、空から降りて人に尋ねていたらしい。
フライングベイビーに遭遇した人々は、それはそれは驚いただろうなぁ。
そんな知りもしない人々のことを思いながら、僕はカイを見つめると、カイは元気よく僕の質問に答える。
「ううん。お母さんは、ヤイウリーアで僕を待ってるのぉ。」
「ヤイウリーア？」
「ヒロちゃん知ってるの？」
何か思い出したる節でもあるのかと思ったが、ヒロちゃんは首を振って僕に先を促させた。
「・・・？えっと、じゃあ、どうしてヤイウリーアにいかないの？」
「うん。だって、呪われた街に行かないと行けないから！」
『・・・。』

カイの元気な言葉に、顔を見合わせた僕とヒロちゃん。
保護者もいないのに、子供一人で空を飛んでいるとはいえ不浄(ディス・エンガッド)の大地で街を探させるなど聞いた事もない。
はじめは親とはぐれたのだろうかとも思っていたけど、聞いているとどうやらそういう訳でもなさそうなんだよね。

「じゃあ、どうして呪われた街に行かないといけないんだ？」
難しく聞いても幼いカイに、どれほど答えることができるか定かでもないし、ヒロちゃんは端的に尋ねる。
「うんとね、ニールティアーに会いに行くの！」
「ニールティアー？」
人の名前か？
「お母さんにね、ニールティアーを見つけられたら帰ってきていいって、それまではお家に帰れないの。だから、色んな人に聞いてたんだけど・・・。」
すると何か思い出したのか、急に涙ぐむカイ。
大きな瞳から、ぽろぽろと大粒の涙が溢れてくる。
僕とヒロちゃんは大慌てだ。
「どおしたの！いきなり！！」

「うわーん！ニールティアーにあうのぉ！でないと、帰れないのぉ！お母さんー！」

・・・どうやら、お母さんのことを思い出したらしいが、いきなり泣き出すカイに僕もヒロちゃんも、どうしていいかわからない。
泣く子には叶わないとは聞くけど本当だよ。
だから、関わらないほうが良いって言ったのに。

それにしても、その『ニールティアー』に会うまで帰ってくるなと、こんな小さな子供を不浄(ディス・エンガッド)の大地に一人で放り出すなんて、なんて鬼

母だ！
こんなに子供を泣かせて！！
そう思うと酷く憤慨(ふんがい)する気持ちが沸いて出てくるけど、それは僕だけじゃなかったらしい。
ヒロちゃんの顔を見れば、酷く硬い表情をしている。
きっと、ヒロちゃんも怒ってるんだな。
うん、うん。
でも、正直僕らには何もしてあげられないよねぇ。

「泣くな、カイ。だったら、私が連れていってやるから。」

・・・ん？

「呪われた街に行って、ニールティアーに会え。それで、さっさと母親のところに帰るんだ。こんなところでメソメソしてても、何の解決にもならないぞ。」

・・・あれれ？

「ほ・・・ほんと？」
「ああ、一人じゃ心細かったな。」
「うう～。」
「よしよし。」

「って！よしよしじゃないでしょ、ヒロちゃん！！」
カイを抱きしめてやっているヒロちゃんに、僕はここでやっと声を上げた。
何二人で、勝手に話進めてるのよ。
そんな明らかに面倒なこと、簡単に引き受けちゃうなんて！
馬鹿馬鹿、お人よしも、ほどほどにしておかない・・・・。

「・・・お兄ちゃん？」
「・・・・。」
溢れんばかりの文句は、しかして、カイの涙で赤くなった瞳に見上げられて詰まってしまう。
・・・そんな、捨てられた子犬みたいな表情で僕を見ないで、お願い。
「・・・・・。」
しかし、カイは何か察しているものがあるのか、ヒロちゃんの腕の中から僕をじっと見上げてくる。

・・・はいはい、負けましたよ。
「何でもないよ。そうだね、一人じゃ心細いよね。」
僕がそういえば、明るく輝くカイの表情。
それを見て僕はガクリと、肩から力が抜けるのを感じた。

・・・泣く子には勝てないって、本当なのね。

第二話　泣く子には勝てません。（後書き）

『異邦の少年　亡国の遺産』第二話です。
本編と違い、正直あまり真剣に取り組んでないというか、気を抜いた連載なのでお目汚しにしかならないような話ですいません。（いや、多分本編のほうもお目汚しにしかなりませんね。）
第二話でわかったことは、カイの目的が『呪われた街』で『ニールティアー』に会いに行くこと。
とりあえず、このお話はそれを主軸に進めるつもりですが、のんびり、まったりとやっていく予定なので、もし、お目汚しでも読んでいてくれる奇特な方がいましたら、気長にお待ちください。

第三話　どうして？と聞かないで。

不浄の大地（ディス・エンガッド）は、生命の育たない死の荒野。
僕は詳しく知らないけど、ヒロちゃんの話では、その昔長い戦争を続ける人間たちに怒った神様が、人間に罰を下すために天使を送り込んで、こんな大地にしてしまったらしい。
まあ、あんまりに昔の話すぎて、いまいちピンとこないんだけど、人間が悪いんだってヒロちゃんは言う。
でも、そんな昔の話なんだから、もう許してくれたっていいと思わない？
別に僕達が何かしたわけじゃないんだして、言ったらヒロちゃんは苦笑した。
その顔は普段あんまり見ないような、ちょっとだけ疲れた顔で僕はあんまり好きくなかった。

まあ、僕はヒロちゃんと一緒にいられれば良いのだから、別にどっちでもいいんだけどね。

第三話　どうして？と聞かないで。

まさか、死の世界と呼ばれる不浄の大地（ディス・エンガッド）を子連れで旅することになるなんて、思ってもみなかったけど、やろうと思えば何とかなる。
僕達はカイと出会って3日、やっと人が集まる街にたどり着くことができたのだ。

正直、子供の歩幅じゃ到底3日で歩ける距離じゃなかったけど、幸いカイは空が飛べた。

その力を使えば、大人も子供も違いはしない。
それに、確かにカイは子供だけれど、僕が想像していた子供とは全然違って、我儘も言わないし、だだもこねなかった。（ヒロちゃんは、僕よりカイの方が大人だと言った）

「じゃあ、ガキ共。私は情報収集に出てくるから、大人しく寝てろよ。」

街に入ると、太陽はすでに不浄（ディス・エンガッド）の大地の地平線に沈みかけていた。
街の名は、チューダスの街。
街の規模は、人口にして１００人近くは下らない、不浄（ディス・エンガッド）の大地の街にしては大きい部類に入る。

街は狭い渓谷（けいこく）に造られており、岩を掘り進めた洞窟に人が住んでいるというのが特徴的だった。
まあ、寂（さび）れた街には違いないけど、それでもこれだけの人間が生きていけるだけのものが、この街には揃（そろ）っているわけで、僕らみたいな旅人もちらほらと見ることができた。
なので、普通の集落や街なんかには、旅人なんて来るはずもないから、宿屋や食べ物やなんてものがないのが、当たり前だけどこの街にはそういった旅人の需要がある以上、供給もきちんとされていた。

そんな街に、ヒロちゃんは以前来たことがあるらしく、街に入ると慣れた様子で洞窟（どうくつ）の中の宿屋を探し当て、店主に薬を差し出すと今日の宿を確保したのであった。（薬といっても、動物の臓物から作ったものだけど、これがなかなか重宝するし、物々交換で喜ばれる商品なのだ）
それで、さっきのヒロちゃんの発言は、宿屋で街で調達した久々の

パサパサしていない保存食以外のものを口にして、一息ついた時の発言だ。
「何、ガキっていうのに、僕も含まれているわけ？」
「そういう物言いがガキだって言っているんだ。」
思わず突っかかった僕のおでこをヒロちゃんが小突く。

「何処かに行くの？ヒロちゃん」
そんなやり取りに、カイがヒロを子犬のように見上げて尋ねる。
気がつくと、僕の呼び方を真似てかカイは『ヒロちゃん』と呼ぶようになっていた。（ちなみに僕のことは小生意気に『エヴァ』と呼び捨てる）
僕には事あるごとに呼ぶなとか言ってどついてくるヒロちゃんだが、カイには何も言わないのが腹立たしい。

「情報収集って言ったろ？カイが言っていた『呪われた街』の情報が無いかどうか、調べてくるんだ。」
ヒロちゃんがそういえば、カイは嬉しそうに顔を綻ばす。
でもね、カイ。
喜びに水を差すようで悪いんだけど、大人っていうのは、ズルイのよ。

「情報収集にかこつけて、お・さ・け。飲みに行く気なんでしょ？」
僕の言葉にヒロちゃんの肩が、びくりと飛び上がる。
日が暮れてからの情報収集なんて、酒場か盛り場くらいしか考えられない。
街にもよるけど、この規模の街ならお酒があっても可笑しくない。
（きっと、以前この街にきているヒロちゃんは、その辺もよく知っているはずだし）
ヒロちゃんは、女性には潔癖なところがあるから、盛り場ってこと

はないだろうけど、これで結構お酒好きなんだよね、この大人は。

「・・・。」

案の定、図星らしく、カイに笑い返したままヒロちゃんは表情を強張らせている。

自分だけ楽しもうなんて、そうはいかないからね。

そう思いながら、一歩近づいたら、ヒロちゃんは口元だけ笑って、眼もとが泳ぐという器用な笑みを浮かべると、

「・・・ま、じゃあ、そういうことで。子どもは先に寝てなさいっ。」

身を翻すとさっさと走って逃げて行った。

・・・逃げ足はえーな、おい。（はっ！ヒロちゃんの口調がつい移ってしまった）

「エヴァ？」

多分、僕とヒロちゃんのやり取りの意味などよく分かっていないのだろうカイが、ヒロちゃんの逃げ足の速さに目を丸くして、僕を呼ぶ。

まあ、追いかけてもいいけど、カイを一人で置いとくわけにもいかない・・・か。

ヒロちゃんは帰ってきたら、みっちり問い詰めてやるとする。

「何でもないよ、カイ。さ、疲れただろ、夕飯も食べたことだし、僕らは早く寝よう。」

何で、僕が面倒みなきゃならないか分からないけど、カイを蔑にしたら、あとでヒロちゃんに何を言われるか分かったもんじゃないしね。

「うん！」

僕の言葉に、鬱陶しいほどに元気のいい返事が返ってきて、僕は苦

笑い。
そんな訳で、駄目な父親を大人しく待つ子供の如く（この場合ヒロちゃんが駄目父なのは間違いない）僕とカイは、宿のくせに洞窟だし、寒い上に、どうにも硬い石のベッドの上に横になったのだ。

「・・・硬いね。」
ヒロちゃんはベッドがあるというだけで喜んでいたけど、僕とカイは不満半分だった。
正直屋根があるだけで、この寝心地は野宿と大して違わない気がする。
「まあ、ぼろ宿屋だからな。でも宿屋があるだけ、良い街だよ。不浄（ディス・エンガッド）の大地の集落は普通民家しかないのが普通だからな。」
「・・・そうなの？」
なんとも不思議そうなカイの言葉に、僅かな違和感を覚える。
不浄（ディス・エンガッド）の大地に生きてたら、普通分かるでしょ。

「カイは今までどんな街で暮らしてたんだ？」
確か、『ヤイウリーア』とかいう聞いたことのない街だったけど、不浄（ディス・エンガッド）の大地で知らない街や集落の街なんて五万とあるから気にしてなかった。
でも、今のカイの発言から考えて、なかなか豊かな街そうじゃないか？と思った。
そもそも、カイもアーシアンの子供にしてはプクプクして、子供らしい丸みがある。（普通のアーシアンの子供の多くは皆、栄養不足でガリガリの場合がほとんどなのに）
「う・・んとね、あんまし大きくなくて、灰色で冷たくて、色々ぎゅって詰まってるの。」
カイの物言いは、いまいち要領を得ない部分が多い。

子供だから仕方ないのかも知れないけど、そこから何も僕が分かることはない。
思わず、イラっとした。
それにしても、大きくなくて、灰色で、冷たくて、詰まってる・・・・どんな街だよ。
しかし、僕がその街を頭の中で想像するより先に、今度はカイが口を開いた。

「ヒロちゃんとエヴァは、ずっと旅をしてるの？」
「あ、うん。そうだよ。ずっと旅をしている。」
二年前から、ずっと僕らは一緒なんだ。

「どっか僕みたいに、行かないといけない場所があるの？」
『行かないといけない場所？』・・・ねえ。
「ないよ。僕たちの旅は目的地がないんだ。」
カイの質問は、かつて僕がヒロちゃんに向かって聞いた質問でもあった。
あの時、ヒロちゃんは僕に向かってこう言い放った。

『何処に行くか？そんなもん私が知るか、流離人（さすらいびと）は旅をする生き物だから、旅をしているだけで目的なんぞ、初めからないもんだからな。』

何の説明にもなってないんだけど、こんな風に自信満々に言い切られると、言い返しようがないよね。
そう言って笑うと、隣のベッドからこちらを不思議そうな瞳でカイはこちらを見ていた。
吸い込まれそうな深い黒に交る、緑の光。
カイの瞳は、珍しい色使いで彩られていることに、岩をくりぬいて造られた窓から注がれる月の光の中で初めて気がついた。

その大きな、円(つぶ)らな瞳に見入っていると、カイがこちらを向いたまま、ぽつりと言葉を落とした。

「じゃあ、どうしてエヴァはヒロちゃんと一緒にいるの？」

「え？」

思いもしなかったカイの言葉に、声が詰まった。

「目的もないのに、一緒にいるのは意味がないよ。」

更に続けられた言葉に、ガン！と、鈍器(どんき)で頭を殴られるような衝撃を感じた。

だって、僕にとってヒロちゃんと一緒にいることに、理由なんて求めたことがなかった。

一緒にいることに、意味なんて必要ないと思っていたんだ。

『あなたはだあれ？』

ヒロちゃんと会う前の記憶を全て失っている僕。

僕の初めての記憶は、見上げた傷だらけで、血だらけの怖い男の人。

それがヒロちゃんだ。

『・・・・一緒にくるか？』

何もわからない、僕にヒロちゃんは手を差し出し、僕はその血で赤く染まった手をとった。

それが誰の血なのか、僕には分からない。

でも、それから、僕は何の疑問を抱くことなく、ただずっとその手に身をゆだねていただけなんだ。

それで、何の問題もなかったし、僕はそれで幸せだった。

なのに・・・・

「どうして旅をするの？」

僕に理由を、意味を問うの？

今まで、誰もそんなこと聞かなかったのに。

「どうして一緒にいるの？」

でも、それは今まで僕とヒロちゃんしかいなかったから。

カイに問われて初めて、そのことに気がつく。

カイは、僕とヒロちゃんの間に、初めて現れた『他人』。

僕とヒロちゃんの関係性を問う人物。

それは、僕にとってーーーーーーー

「エヴァ？」

カイが僕を呼ぶ声に、僕は思考を止めた。

でも、その声に耳をふさぎたくなるような気持ちに襲われる。

僕はヒロちゃんさえ、一緒にいてくれればそれでいいのに、何で『どうして？』なんて聞くんだよ。

お前に関係ないだろ！

カイはたった一言、疑問を口にしただけなのに、彼に怒鳴りつけてしまいそうなほどの凶暴な僕がいた。

そんなこと、おかしいって分かっているのに。

カイが悪い訳じゃないって分かっているのに。

だから、僕は沈黙した。
「寝ちゃったのかな？」
どうして、こんな気持ちになるのか分からないまま、カイが僕の返事を諦めた様子にほっとした。
ただただ、カイの一言にこれほど気持ちを揺らしている自分を持て余して、早くヒロちゃんが帰ってくればいいと願った。

きっと、ヒロちゃんの顔を見れれば、こんな気持ちはなくなるはずだと・・・。

第三話　どうして？と聞かないで。（後書き）

ものすごっく久々な更新、第三話をお送りします。
一・二話とは少し雰囲気が違いますが、時間が空いていたからではなく、導入部から話の中心に近づいているだけですので、あしからず（笑）
番外編は十話前後くらいの予定で、カイや呪われた街が話の中心ですが、今回で少し察していただけたかと思いますが、ヒロとエヴァのかかわりについても触れる予定です。
一応、これは『東方の天使　西方の旅人』の番外編としていますが、本編を読まなくても大丈夫な風にしてあります。しかし、分かりにくい部分があるかもしれません。こちらだけ読んでいらっしゃる方がいましたら、大変申し訳ありません。興味がありましたら本編も読んで頂けたら幸いです。

第四話　呪われた街・・・かもしれない場所。

不浄の大地（ディス・エンガッド）の夜は静かだ。
まるで、何もかも死に絶えてしまったかのように、静寂（せいじゃく）が夜を支配する。

そんな夜に慣れてしまうと、人の気配がそこらかしこにある街の夜は、何となくソワソワする。
でも、別にだからって、寝れないほどそれが気になるわけでもないし、夜は十分に街は静かになる。
それに、そろそろ月が空の天辺（てっぺん）にやってくる時刻。
人々が寝静まる時刻だ。

なのに、そうっと、そうっと、僕に近寄る気配が一つ。

「・・・・ヒロちゃん。」

僕はその名を呼んだ。
一瞬だけ、驚く気配がする。
「起こしたか？」
窓から注がれる月光に浮かび上がるヒロちゃんは、いつもと同じ。
「・・・ううん、起きてた。」
カイはもうぐっすり眠りについている。
僕らの会話は自然と小声になった。
僕はカイが起きないように静かにベッドから起き上がると、ヒロちゃんに無言で抱きついた。

「・・・・エヴァ？」
「・・・・。」

抱きついたヒロちゃんからは、僕の想像通り少しだけお酒の匂いがした。
それでも、僕の様子が変なことに気がついたヒロちゃんは、僕の好きなようにさせてくれる。
これじゃあ、子供って言われても仕方がない。

ーーーーーーどーーーーーーーーれ。

夜の闇から、僕を呼ぶ声が聞こえた気がした。

第四話　呪われた街・・・かもしれない場所。

結局、僕が落ちつくまでヒロちゃんは、背中をぽんぽんと叩きながら、僕をあやしてくれた。
でも、僕は最後までヒロちゃんに抱きついた理由を話すことができなかった。
だって、どうしてこんなに自分が不安になったか、よく分からないんだ。
ヒロちゃんに何といって説明していいか、分からなかった。

ヒロちゃんと一緒にいられなくなったら、どうしよう。

カイの問いに答えられなかったら、一緒にいることに理由や意味を見つけだすことができなかったら、もうヒロちゃんとは一緒いられないんじゃないか。
意味もなく、僕はそんな強迫観念（きょうはくかんねん）みたいな感情に囚（とら）われていた。
でも、ヒロちゃんの顔を見たら冷静な自分を取り戻して、そんなこ

とを考えた自分が馬鹿馬鹿しく思えて恥ずかしくなった。（だから、ヒロちゃんに何も言えなかったっていうのもあるんだけど）

そして、それぞれのベッドに入り一寝入りして、朝が来た。

「本当に、呪われた街の場所が分かったの？！」
カイが嬉しそうな声をあげる。

一番遅くに寝たくせに、一番早起きしたヒロちゃんはカイが起き出すと、さっそく昨日の情報収集の成果を報告したんだ。
どうやら、お酒を飲みつつもちゃんと情報も収集してきたようだ。
（エライ、エライ）
それにしても、広い不浄の大地（ディス・エンガッド）で、そんなピンポイントな情報を集めてくることができたものだよ。
そう思ったことを喜ぶカイの横で、嫌み半分で言ったらヒロちゃんは苦笑した。

「まあ、カイの話を聞いた時から、なんとなく目星は付いていたからな。」

「どういう意味？」
ヒロちゃんは、元々『呪われた街』を知っていたってことなのかな？
僕のそんな思考を読んだように、ヒロちゃんは言葉を続ける。
「『呪われた街』という名称に聞き覚えはないが、ある街に行くと呪い殺される・・・という話は聞いたことがある。不浄の大地（ディス・エンガッド）では、有名な話の一つだ。」

・・・なんだ、じゃあ昨日の夜はやっぱり、何も情報収集をしてきた訳じゃないんじゃん。

ていうか、『呪い殺される』てちょっと物騒(ぶっそう)な話じゃない？（『呪われた街』ていうのも、たいがい怖い話だけどね）

「実際に私も行ったことがある街じゃないが、概(おおむ)ね位置は把握している。こっから、歩いて一週間という所だな。」

いやいや、僕が聞きたいのはそこじゃなくて。

「ただ、言っておくがカイの言っている『呪われた街』ではないかもしれない。これは一つの可能性にすぎないからな。」

「うん！ありがとう！」

そう言ってカイはヒロちゃんに抱きつく。（言っておくけど、まだ、『呪われた街』か確定した訳じゃないんだよ）

・・・だから、僕が聞きたいのは

「『呪い殺される』って、どういう意味なの？」

普通、今の話を聞いたら聞くべきは、そこでしょ。

ヒロちゃんもカイも、何でそこをスルーしているの。

だって、『呪われる』上に、『殺される』って・・・、何でそんな恐ろしい街の話を聞いて喜ぶかなぁ？

「ああ、やっぱり気になるか？」

「当たり前だよ。言っとくけど、僕は呪い殺されるのはまっぴらだよ？」

僕の言葉にあっけらかんとしているヒロちゃん。

全く変な所で臆病(おくびょう)で小心者のくせに、こんなところで鈍感なの。

「心配しなくても『呪い殺される』なんて、くだらない噂だ。ただの人が少しだけ多く死んだという記録が残っている亡国(ドルガバ・チェシエ)の廃墟ってだけだ。」

いやいやいや、その『人が少しだけ多く死んだ』というのが、大問題と僕は思うのですよ。

でも、僕のそんな思いなど無視して、ヒロちゃんは『呪われた街』・

・かもしれない場所の説明をカイに始める。

それを大体要約すると、こんな感じになる。
まず、亡国(ドルガバ・チェシエ)の廃墟っていうのが何かといえば、それは千年以上前に滅びた人間の街の廃墟のことなんだ。
話すと長くなるんだけど、そもそも千年前、この大地は不浄(ディス・エンガッド)の大地の面影なんか見当たらないくらい、東方(サフィイラ・ファイリス)の楽園という名に、相応(ふさわ)しい豊かで、美しい人間たちの大地だった。
人間たちの文明も栄華を極め、今では考えられないくらい巨大な国々がたくさんあった。
でも、たくさんの大国があれば、自然とこの大地の覇権(はけん)をめぐって戦争がおこるのは必然だったのかもしれない。
そして、永遠ともとれるくらい長く続き、終わりの気配を見せない戦争が白き神・イヌア・ニルヴァーナの怒りに触れたんだ。

白き神は人間たちに戦いをやめるよう、天使を遣(つか)わしたんだけど、人間たちはそれに反発して、神と天使の言うことを聞こうとはしなかった。
そして、神は人間たちに罰を下したんだ。

終焉(ディルト・ヴェネス)の宣告。

僕はヒロちゃんの話を聞いただけだけど、万象の天使っていう天使で一番偉い人が人間たちに与えたその罰によって、楽園だった大地は今の死の荒地に変わって、たくさんの人間が死んでしまい、栄華を誇った人間の文明は崩壊した。
それで、楽園の名残は最後の楽園天使(フィリアラ・ディアス)の領域に残すのみとなった・・・らしい。(正直、僕にはあんまり関係ない話だと思うんだけど、ヒロちゃんがそれくらい覚えとけって五月蠅(うるさ)いんだ)

えっと、長い前置きになったけど、要は亡国の廃墟（ドルガバ・チェシエ）っていうのは、終焉の宣告（ディルト・ヴェネス）によって滅んだ人間の街の跡ってこと。
もっとも、過去の栄光の影は微塵（みじん）もなくて、ただ廃墟があるだけなんだけど、不浄の大地（ディス・エンガッド）には、そんな過去の残骸（ざんがい）みたいな場所が点在しているんだ。
だけど、アーシアンたちは逞（たくま）しいもので、そんな廃墟を利用して、自分たちの街を作ったりすることもあって、そういった街は荒地を一から街にするよりも簡単だから大きな街だったりするから面白い。
（あ、これもヒロちゃんが言ってただけなんだけどね）

でも、その『呪われた街』かもしれない街というのは、どうもそういう雰囲気じゃないらしいんだ。
街の名前は、ファシジュの都。
アーシアン達に発見された亡国の廃墟（ドルガバ・チェシエ）のほとんどは、さっき言ったように新たな街として再利用されることが多いんだけど、この街は多くのアーシアンの目に触れているのに、まだ無人の廃墟のままらしい。
もちろん、街を発見したアーシアンたちは、過去にそこを自分たちの新しい居場所にしようとしたらしいんだけど、その街に向かったアーシアンたちの殆どは死に、命からがら帰ってきた人々もいるんだけど、精神異常を起こし、始終何かに脅え、ぶつぶつと言葉を呟くらしい。

『あいつが、あいつが・・・・・来るっ！』

そして、帰ってきた人々の首筋には、必ず紫色をした花の刻印が押されているというのだ。
以上の事柄から、アーシアンたちはファシジュの都を怖れ、いつのまにかあの街に近づくと呪い殺されると噂し、街に近づかなくなったらしい。

ただ、これは数百年前の話であり、何の確証も証拠もない。
確かに街自体は存在しているらしいんだけど（ヒロちゃんは、旅の途中で遠くから見たことはあるらしい）、そういった迷信めいたものを信じやすいアーシアンたちは、街に近づきもしないらしい。
こんな事から、ヒロちゃんのさっきの『くだらない噂』っていう発言につながるんだろうけど、やっぱり怖くないなんて、僕には言えないよ。
本当に、そんな恐ろしい街に行かないといけないのかな？

「・・・という訳なんだが、カイ。お前の行きたい街だと思うか？」
ヒロちゃんはそういって、カイを見下ろす。
ヒロちゃんは、僕に対してもそうだけど、子供だからって本当の意味で子供扱いはしない。
ちゃんと、一人の人間として意見を尊重してくれる。

でも、カイはヒロちゃんの言葉に瞳を揺らす。
「分からないよ。僕、名前しかしらないし・・・、でもその街のような気がする。」
「はあっ？！」
そんな訳のわからない物言いに、僕がきれた。（せっかく、ヒロちゃんが聞いてくれているのに、その物言いはなにさっ）
「分からないって、自分が行きたいんでしょ？！そんな危なそうな町に行くんだ、ある程度確証がないといけやしないよっ！！」
僕は勢いのままカイの肩を掴んだ。
カイの目が、驚きから怯(おび)えに変わる。

「やめろ、エヴァ。子ども相手に何をむきになっている？」
ヒロが突然興奮した僕を引き離して、取り成すように言った。

「・・・・・あ。」
その声に我に返る。
・・・僕は何を言った？
さっきの僕の興奮は、覚えのない衝動（しょうどう）だった。
何であんなことを言ったんだろう？
夜といい、今といい、僕は自分で自分が分からなくなった。
僕はヒロちゃんに支えられながら、手で前髪をかきあげた。
「ごめん・・・。」
カイの目は見られなかった。
僕には、それにしか言えなかった。
ともあれ、こうして僕らはその呪われた街・・・かもしれない場所・ファシジュの都に向かうこととなったんだ。

第四話　呪われた街・・・かもしれない場所。（後書き）

こうして、エヴァたち一行は本題の『呪われた街』へ向かうことになりましたが、その前にエヴァの癇癪について、少し補足を。
本編がないと分かりにくいのかもしれないのですが、ヒロと出会う前の記憶を持たないエヴァにとって、ヒロとは彼の中で大きな部分を占める存在です。
加えて、ヒロがエヴァを子供だと称しているように、実際のところ2年前からの記憶しか持たないエヴァは、実のところそのまま『二歳児』とそう変わらないのです（笑）
だから、この一連のエヴァの癇癪は、大好きな親の関心が突如として現れた『弟』にとられてしまったような、でも自我がはっきりしてきたから素直にそれを表現できないような子供なんです。
エヴァ視点になっているし、なまじ知識はあるので、何だか深刻そうに見えるんですが、要はたんなる焼餅です。それもたわいもない子供の（笑）

第五話　仲直りをいたしましょう。

頭悪そうな風体だけど（こんなこと言ったら、また叩(はた)かれるな）、あれでヒロちゃんは中々博識(はくしき)。
僕が聞くと大抵のことだったら何でも答えてくれるし、聞いてもいない僕が知らないことも色々説明してくれる。（それが鬱陶(うっとう)しいときもある）

詳しい話は知らないけどヒロちゃんのお父さんが学者みたいな人だったらしく、そんなお父さんの影響で意外と（しつこい？）博識なヒロちゃんに尊敬の眼差(まなざ)しを向けると、照れた顔で親父の受け売りだけどなと笑う。
ヒロちゃんは家族のこととか、自分のことはあんまり喋(しゃべ)らないけど、そういう様子からヒロちゃんがお父さんを好きなんだなっていうのは伝わってくる。
だから滅多(めった)に見ることはできないけど、そんなレアなヒロちゃんの表情も僕は好きなんだ。

見ているだけで、心が温(あたた)かくなったから。

だから、どうかその笑顔はカイには見せないで。
そんなことをいう資格が、僕にあるわけでもないし、必要もないはずなのに、どうしてか、そんな思いが僕を支配する。

こんな僕は・・・嫌いだ。

第五話　仲直りをいたしましょう。

街で長旅の準備を済ませると、僕らはすぐにファシジュの都を目指して、不浄の大地に繰り出した。
そのこにあるのは照りつける太陽、乾いた空気、永遠とも思われるような一面の地平線。
それらは絶望しか、僕らに与えない。
死の荒地である不浄の大地は相変わらず、そこを行くものに優しくなく、歩いている僕らを拒むかのように厳しいままだけど、それでも僕らは歩き続けて一週間、もうすぐ呪われた街かもしれないファシジュの都の近くまで来て、地平線の彼方にぼんやりとファシジュの都の姿が見えていた。
見えた瞬間は、僕ら三人とも一週間歩いた苦労が報われたと、テンションが上がったんだけど、それから結構歩いたけどまだ到着はしていない。

そんなこんなで次第に三人とも無言になりながら歩いていたんだけど、僕は右斜め上空をフラフラと飛び回るカイの姿をちらりと視界に入れて、すぐに外しす・・・なんてことを繰り返していた。
しかして、どうして、そんな挙動不審な行動を繰り返していたといえば、カイにあんな態度をとってしまったことを謝れないものかと様子を窺っているんだ。
だって、あれ（カイを無視したり、詰め寄ったりとか）は、どう見ても僕が悪い。
僕だって、それは分かってる。
だからモヤモヤする自分がまだいるのは確かなんだけど、何とかタイミングを見計らってカイに謝って、すっきりしてしまいたいと思っているんだけど。
なのに、そう思っているだけで、それができない自分にイライラして、ただただ時間ばかりが過ぎて、謝るタイミングを完全に僕は逸してしまっていたりするのだ。

・・・僕は子供で、その上、馬鹿だ。

ヒロちゃんの横を黙りこくって歩きながら、そんなことばかり考えて僕は凹(へこ)んでいた。

そんな僕の神経を逆撫(さかな)でするように、カイが飛行高度を下げてきて、僕とは逆のヒロちゃんの横にやってきた。（あれから、カイも僕をどことなく避けているような気がするのは、僕の被害妄想なのかな？）

「ねえ、ヒロちゃん。」

「ん？」

「何かお話して。」

・・・唐突。（多分、一向にファシジュの都に着かないから、退屈してきたんだろうな）

だけど、これで結構子供好きのヒロちゃんは、カイの言葉に愛想よく答える。

「何がいいだろうな？あんまり、子供むけの話は知らんのだが・・・。」

確かに、ヒロちゃんの話は小難(こむずか)しいものが多くて、聞いていてチンプンカンプンの時が多い。（要は、自己満足のために話している時が多いんだ。本人に自覚はないみたいだし、別にいいんだけど）

「そうだ。願いを叶えてくれるという翼の話はどうだ？」

「翼？」

カイがオウム返しに言いながら、首をかしげた。

僕も知らない話である。

「ああ。子供むけといえばこれだ。エヴァにも多分、話したことなかったよな？」

そう言って僕を振り向くヒロちゃんの表情は優しい。
僕はそれに頷こうとしたけど、ヒロちゃんの向こうにカイと目があってしまい、咄嗟(とっさ)に僕は顔を背(そむ)けてしまった。
そんな僕の態度に、ヒロちゃんが溜息をつく気配がした。
僕だって、こんなの良くないって分かっているつもりだけど、どうしていいか分からないんだもん。
だって、そもそも僕は今までヒロちゃんとしか喧嘩したことなかったし、ヒロちゃんと喧嘩して、こんな風に気まずい思いをしたことはなかった。

「・・・。」
こうなってしまうと、僕としては沈黙を決め込むしか思いつかなくて、何とかヒロちゃんが僕とカイの間を取り成してくれるのではないかと、淡(あわ)い期待を寄せたんだけど
「じゃ、続きだけどな。」
と、自分の話をし始める。

・・・ちょっと、こういう時に子供たちを取り持ってあげるのが大人でしょ？

僕は自分のことを棚に上げて、ヒロちゃんに少しだけ恨みがましい視線を送った。
ヒロちゃんは、そんな視線を受けてもどこ吹く風で話を続ける。
「そう。不浄(ディス・エンガッド)の大地の何処かには、どんな願いも叶えてくれるという白い翼が眠っているという話なんだ。」
「わぁ！じゃあ、僕のお願いも？」
「ああ、もしその翼を見つけることができればな。」
まるで、おとぎ話みたいな伝説。
この殺伐とした不浄(ディス・エンガッド)の大地には、非常に珍しい話だな。

「でも、どうしてその翼はお願いを叶えてくれるの？」
カイの質問はもっともな気がした。
大体、『翼』単体っていうのも気になるよね。
『翼』って普通、鳥とか天使とかに付いているものだもん。
「その翼は特別な翼だからな。何せ神と契約を交わし、強い力を得た天使を妬(ねた)んだ悪魔が、剣で切り落としたという、いわくありげな翼なんだ。」
ヒロちゃんの顔が、俄然(がぜん)輝きだす。（うんちくを語り出すときのヒロちゃんは、いつもより楽しげなのだ）
「古い言葉で、翼は『エヴァ』と言う。不浄の大地(ディス・エンガッド)でも良く知られているこの話の中でも、切り落とされたこの翼は『エヴァ』と語り継がれていることが多い。まあ、口語伝承(こうごでんしょう)だから人や地域によって違いはあるがな。」
「・・・。」
こうなると、ヒロちゃんを止めることは誰にもできないだろう。
「その天使からもぎ取られた翼(エヴァ)は天使と同じ魔力を秘め、眩(まぶ)しいほどの純白で、美しく見るもの全てを魅了する、すごい力を持っていた。それを知った悪魔は奪った翼(エヴァ)を、天使が再び手にすることがないように、この不浄の大地(ディス・エンガッド)のどこかに封印してしまった。」

・・・『エヴァ』って、僕の名前と同じだ。

「さて、天使の元に帰りたい翼(エヴァ)だが、封印されていては身動きがとれない。また、翼を失い飛べない翼(エヴァンシェッド)の天使と呼ばれるようになった天使は、天使故に穢(けが)れの象徴である不浄の大地(ディス・エンガッド)には踏み入ることができない。だから、翼(エヴァ)は封印の場所に足を踏み入れる人間に契約を持ちかける。自分を飛べない翼(エヴァンシェッド)の天使のもとに返してくれるのなら、お前の願いを何でも一つだけ叶(かな)えてやろう・・・とな。」

僕とは何も関係のない話だけど、何度も出てくる自分と同じ名前に何だか気恥ずかしくなった。
それにしても、自分の名前に『翼』という意味があったという新しい発見に胸が躍った。
自分の名前と関係しているか分からないけど、そんな伝説があるなんて何かドキドキしない？
それをヒロちゃんに伝えようと思ったんだけど、それはカイのはしゃぐ声に遮(さえぎ)られた。

「そうなんだっ！じゃあ、エヴァはすごい翼と同じ名前なんだ。かっこいいね！！」

「・・・うん！」
カイに対してわだかまりがあったはずなのに、無邪気に言われて思わず普通に返事をしてしまった。
それに、名前以外何も覚えていない僕にとって、この名前は特別だから、カイのめちゃくちゃな理屈でだけど、褒められて嬉しいという感情が僕を素直になせた。（こんなことで、機嫌が治る僕はやっぱり子供だ）
僕とカイは笑いあった。
子どもは子ども同士、言葉はなくとも互いの笑顔一つで、それまでのぎこちなさが一瞬で吹っ飛んだ。

「それで、翼(エヴァ)はどこに封印されているの？」
カイは僕のそばまで飛んでくると、肩に手をのせて、ヒロちゃんに質問をした。
そう言われてヒロちゃんは、少しだけ驚いた顔をした。
「・・・さあ、さすがに私もそれは知らないな。」
微妙な間があったのは、何でだろう？
それも気になったけど、カイとまた笑いあうことができて、気が大

きくなっていた僕はヒロちゃんのその言葉にくってかかっていた。
「なに？自分で話をふっといて、結局それなの？まるで子供話じゃないかっ！」
「うんうん。そうだよぉ！僕もお願い聞いてほしいのに。」
カイがそれに同調するように、声を重ねる。
僕らは互いに、「ねー？」と顔を見合わせた。

そんな様子を見て、ヒロちゃんは苦笑して僕らを見た。
「やっと元気が出たな。」
「え？」
「街を出てから、お前たちずっと様子が変だったろ？」
やっぱり、ヒロちゃんは気が付いていたんだ。
僕を元気づけるために、この話をしてくれたのかな？
そこまで想像して、何か嬉しくて胸がいっぱいになった。
でも、そんなこと素直にヒロちゃんに言えるわけもなくて、
「そ・・・、そんなことないよ！な、カイ？」
と僕は照れながらそっぽを向く。
「うん！」
カイは、それに何の考えもなしに笑顔で頷いてみせる。（多分、カイも僕が久しぶりに話しかけているから、嬉しいのかもしれない）
「・・・そうか、それならいんだ。」
ヒロちゃんには照れている僕の心も、全部お見通しなんだろうな。
優しい声と笑顔が、それを僕に教えてくれている。
でも、ヒロちゃんがちゃんと僕を見てくれているということが、僕の不安定だった心を落ち着かせているのを感じた。

「カイ、早く行こう！ファシジュの街はすぐだよ！！」
いつもの僕を取り戻して、僕は飛んでいるカイの手を引いた。
「うん。」
カイも久々に僕が彼に構いだしたこと、それが嬉しいのか、僕を追

い抜いて力を増して僕の手を引く。
つんのめりそうになりながらも、僕とカイはヒロちゃんを置いて不浄の大地を駈け出した。
笑いながら、こんな風にこの乾いた土を踏みしめるのは初めてだった。

「ヒロちゃんっ！早く！！」
「置いてっちゃうよ？！」
僕らは肩で息をしながら、背後に遠いヒロちゃんに向かって叫んで、手を振った。
なんだか楽しくて、興奮して、ハイになっていた。

だから、油断していたんだ。

こちらを呆れ気味半分で見ていたヒロちゃんが、瞬間表情を硬くする。
「ーーーーろっ！」
そして、何かを大声で叫んだ。
でも、遠いし、意味が分からなくてその声は聞き取りにくかった。
「なぁにぃ、ひーーーー。」
だから、言葉を問い返そうとしたんだ。
でも、その言葉の途中に、僕とカイの真上にあるはずのない影がかかった瞬間に、やばいと思った。

「・・・・え？」

僕は後ろを振り返った。
「ーーーー逃げろっ！！」
ヒロちゃんの声が、今度こそ届いた。
でも、それはもう遅いよ。

そこには、こちらに向かって大きな斧を振り上げている、大きな黒い影がいたんだから。

「うわぁぁぁぁっ！！！！」

僕とカイの叫びが、不浄の大地（ディス・エンガッド）の高い空に響いた。

第五話　仲直りをいたしましょう。（後書き）

子供の喧嘩は、すぐに仲直りした方がいいですよね？（本当は一週間くらい二人はギクシャクしてたみたいですが）まあ、仲直りというかエヴァが一方的に機嫌を損ねていただけですし。わだかまりがなくなれば、エヴァとカイは兄弟みたいな感じです。

そうして、今回少し触れた『白い翼の伝承』については、本編の方でちょっとばかし関わってくる部分でもあるので、本編も見ていただいている方は「へえ。」と思われる部分もあるかもしれないですね。

第六話　恐怖！骨人間現る。

僕の背中には、ヒロちゃんに身を守るために持たされているライフルがある。
でも、この距離と間合いではライフルを構える余裕もない。
もう・・・、駄目だっ。
僕は咄嗟（とっさ）にカイを腕の中に抱え込んで、やってくる衝撃に身を縮ませた。
そして、ザンッ・・という鈍い音が僕の耳に届く。
でも、あれ？
いつまでたっても、何の痛みもない。
僕は、恐る恐る片目を開けてみる。
「ひぃっ・・・！」
視界にいきなり飛び込んできたのは、見るからに不気味な人間の頭蓋骨（がいこつ）。
見たことがない訳じゃないけど、何の心の準備もないままに、いきなり目の前に転がってきたそれに僕は驚くしかない。
「が・・・骸骨（がいこつ）？」
カイもそれを見て動揺しているのか、声が裏返っている。
僕らは一度目を合わせて、自分たちの見間違えじゃないと確かめると、改めてそれに目をやった。
「・・・な、何なの？」
「なんでこんな所に・・・」
と混乱しながらも、とりあえず少しだけ安心した僕らであったが・・

・

「きいいいいいいっ！」

『ぎゃぁーーーーーっ！』

突如として、頭蓋骨（ずがいこつ）がカタカタと動き出しながら、悲鳴のような鳴き声をあげたのだ。
それに呼応するように、僕らもこれでもかというくらい絶叫した。
なんなの、これはっ！！！

第六話　恐怖！骨人間現る。

「いやいやぁ。驚かせてしまって、すいませんでした。まさか、あんなに驚くなんて思ってなかったもので。」

そう言って、角ばった白い手をツルツルの頭に当てて、ぺこぺこと頭を下げている目の前の人物に、ヒロちゃんの背中に隠れながら僕とカイは怯（おび）えるような視線を向けていた。
そんな僕らの様子に、ヒロちゃんは少しだけ呆れるように息を一つ吐くと、僕らの代わりに先ほど僕らを襲おうとしていた人物に向き合ってくれる。

「おい、骨人間。」

・・・、またまたヒロちゃんの愉快ネーミングセンスが出たけど、でもこのネーミングは案外目の前の人物の特徴を端的（たんてき）に表している

のかもしれない。

骨人間。

すなわち名前の通り、骨だけでというか、骨でしか全てが形成されていない存在。
最初に振り返った時は、逆光になっていて黒い影としか僕らには見えなかったそれは、何と僕らより二倍近くはある大きさの、動いて喋る人間の骨だったんだ。
何か種でもあるんじゃないかと思ったけど、本当に骨だけの骨人間には、もちろん骨の中身は空っぽで、目玉だって、肺だって、それどころか心臓だってないんだ。
どうやって、動いているのか全く原理がわからないし、顎をカポカポ動かしながら喋っているけど、骨だけでどうやって声を出しているのかも非常に不思議である。
ともかく、骨人間は全てが非常識といっていい存在だよ。
この世界には、僕らの知らないことなんて山ほどあるっていうのは分かってはいるけど、それにしたって自分の意志を持って動く骨なんていうのは、ちょっと驚きを通り越して僕には恐怖しか感じられない。

「すいませんで済むと思っているのか？」
「すいませんっ！」

そんな世にも恐ろしい骨人間相手に、ヒロちゃんは僕らの保護者然として仁王立ちに、腕組みをして正座して、ぺこぺこと頭を下げる（多分）彼を見下ろしていた訳なんだけど、どうしてこんなにこの骨人間が僕らに腰が低いといえば、説明するには骨人間が僕らを襲おうとした時に話を戻さないといけない。
あの時、僕らに襲いかかろうとしていたこの骨人間の攻撃が僕らに

及ばなかったのは、ヒロちゃんが離れた場所から骨人間に攻撃をしてくれたからで、その攻撃により骨人間の首から下が吹っ飛んでバラバラになり、頭だけが僕らの前に転がった訳なんだ。
どうやら、骨がバラバラになっても死ぬことはない骨人間みたいだけど、そりゃ体がバラバラになっちゃ何もできないらしく、『きー』と悲鳴みたいな声を上げた後、涙目になって抱き合っている僕とエヴァに幾分か申し訳なさそうな声で、

『あのぉ、申し訳ないんですが、頭を体にくっつけてくれませんか？』

と言い出したのだ。
思わず、眼が点になった僕らである。
しかして、もう何もしないと約束をさせてから、ヒロちゃんが彼の骨を拾い集めてやると（僕らは怖いから手伝いもしなかった）、何かの魔法みたいに骨たちが浮き上がりガチャガチャと音鳴らしながら骨同士がくっついて（骨同士が近くにないとくっつかないらしい）、無数の骨は骨人間になったんだ。
そういう訳で骨人間にしてみれば、ヒロちゃんは命の恩人（いや、バラバラにしたのもヒロちゃんだけど）みたいなものだし、そもそもこいつが僕らを襲うとしたのが悪いこともあり、彼はさっきからこれほどまでに僕らにぺこぺこと頭を下げているのだ。（まあ、ヒロちゃんには敵わないと、骨身（笑）にしみているというものあるかもしれないけど）

でも、腰が低い割にはヒロちゃんがどんなに骨人間に問い詰めても、『すいません』としか言わずに、どうして僕らを襲ったとか話そうとしないし、自分が何者であるかも頑（がん）として口を割らないんだ。
ヒロちゃんはそれに対して、根気強く淡々と相手をしているけど、長い付き合いの僕だから分かる。

ヒロちゃんは多分、ものすんごい怒っている。
まず、骨人間から視線が全く外れないないし、口調もいつもと変わらないようだけど、声のトーンが微妙に低い、更に言わせてもらえればピクピクと眉毛が動いている。
これは、ヒロちゃんが何かを我慢している時の癖なんだ。

・・・相当、イライラしているな。

「おい、いい加減にしないか？」
「何をです？私には謝ることしか・・・・・。」

ドンっ！
ヒロちゃんは、表情は変えないまま自分の剣を乾いた大地に突き立てた。
それから、ゆらりと一歩前に出ると、いきなり硬い骨人間の顎を掴み上げた。
「・・・・な・・・・何ですかね？」
骨人間がカタカタと不気味な乾いた音を鳴らしながら、声を出す。
「これ以上、私の言うことにしらを切る気なら、こっちにも考えがある。」
そんな凄(すご)みを利かせるヒロちゃんに骨のままじゃ、表情もくそもないはずなのに、骨人間が明らかに動揺しているのが分かる。
「な・・・なんでしょう？」
ヒロちゃんは、そんな様子の骨人間に一層晴れやかに微笑んだ。

「例えば、あんたは骨をバラバラにされても死なないんだよな？なら、その骨をいっそ粉々の粉末にして風に流したりしたら、どうなるんだろうな？」

骨人間がその言葉の一瞬の間の後、バタバタと急に骨を動かし始め

て、ヒロちゃんから逃げようとするけど、しっかり顎(あご)を捕まえられた彼は逃げれそうもない。
どうやら、そんなことをされたら、さすがの骨人間もひとたまりもないらしい。
ヒロちゃんは、そんな様子を楽しそうに見ながら、彼に最後通告を言い渡した。

「そうされたくなかったら、さっさと話せ。」

小心者のくせに、ヒロちゃんは切れると怖い。
僕は滅多(めった)に見れないヒロちゃんの切れた姿に離れた場所から見守りながら、何故だか骨人間に同情心すら覚えたりした。

それから数十分後。

「ほう、じゃあ、お前はファシジュの都の住人なのか。」
「・・・はい。まあ。」
ヒロちゃんの問いに洗いざらい話をしている骨人間がいた。

彼の話を要約すると、以下のようになる。（骨人間に話させるための、ヒロちゃんの脅しの一つ一つまで説明していると、時間がかかるから要約させてもらうね）
彼の名前（やっぱり性別は男性だった）は、ネイサン。
年齢は驚くことなかれ、推定１０３４歳！
あの呪われた街かもしれないファシジュの都に住む、奥さんも、子供もいる一家の大黒柱らしい。（家族も皆骨なのかな？）

とはいえ、今は骨人間の彼だけど、元はれっきとした人間だったらしいんだ。

何でも千年前、神と天使が戦い続ける人間に罰(ばつ)を与えようとしていることを知り、そのことに恐れ慄(おのの)いたファシジュの都の住人達は、天に助けを求め続け、そしてそれに答えた天は彼らの前に一人の天女を遣(つか)わしたというのだ。
そして、その天女は一つの救いの道を彼らに示した。

その末路が、この骨人間・・・という訳なんだ。

天女が示した救いの道は、住人たちを天使たちから救うものではなく、その天女の神通力によって彼らを不死の体とし、最悪の罪業たる死からの解放するというもの。
だが、その対価として天女は彼らの血肉を奪うというのだ。

僕はその話を聞いた瞬間に、その天女という人が、果たして本当に天から遣わされた存在なのかと疑問を感じた。

それでも、天女の示した救いにより彼らはちゃんとした肉体は失われるたけど、精神は永遠に世界に留(とど)めることができ、完全なる死という恐怖から解放されるわけで、住人達は死ぬことを何より恐れていたらしく、その天女の提案に飛びついたというのだ。
そして、天女に与えられた不死の体をもって、終焉(ディルト・ヴェネス)の宣告を乗り切り、千年以上たった今でもファシジュの都に骨人間として生き続けているというわけだ。
彼らは骨人間になったとはいえ、その思考や感情はそのままだし、死なない代わりに、体は骨になり、物を食べることも、眠ることも必要なくなり、それはむしろ死の荒地と化した世界で生きるには適した体といえるのかもしれない。

そして、血肉と共にもう一つ、彼らが失ったものがあった。

それは、世界を自由に動き回ることができる自由。
都から遠く離れると、天女の力が及ばなくなり、骨人間はただの白骨死体になってしまうというのだ。
まあ、結果として彼らは天使たちの厳罰から逃れた訳で、千年たった今でも彼らは天使が自分たちを見つければ、神の裁きを下されるのではないかと（その辺り、天女のご加護はないのか疑問だけど）、自分たちの存在が外に漏れることを異常に恐れて続け、自分たちから外に出ようなどと思ってもいないらしいから、別にそんな自由はいらないのかもしれないけど。

と、まあ長くなったけど、そんな理由から、ファシジュの都の住人達は自分たちの存在が他に知られることのないように、この街に来た人間たちは殺してしまったり、そして、何らかの魔法によってその記憶を消したりしてきたというのだ。（だから、都に近づいた僕らを襲ったんだろう）

それが、結果として噂として広がった呪いになった・・・という訳だ。

なんか怖い話だよね。
その話を聞き終わった率直な感想は、それにつきた。
だって、死にたくないからって、骨人間までになって生きたいって、少なくとも僕は思わないよ。（話の腰を折らないように、そんなことは口にはしなかったけど）
でも、そんな怖い話も、結果として僕らにとってはすごい収穫になったんだ。
だって、その天女の名前というのが、

「ニールティアー。本当に、その天女の名前はニールティアーなんだな？」

「はあ、そうですけど。」
そして、ネイサンに聞けばその天女は未だに都にいるというのだ。
これは、間違いないよ。
きっとファシジュの都こそが、カイの求めていた『呪われた街』なんだ。
僕とカイは、二人から少し離れた場所で手を取り合って喜んだ。
でも、それも一瞬のことでヒロちゃんの言葉に二人とも固まった。

「じゃあ、ファシジュの街を案内してもらおうか。」

そうなんだ。
ニールティアーはファシジュの都にいるんだから、会うためにはあの都に行かないといけないんだ。
話によれば、ネイサンみたいな骨人間の巣窟になっている、まさにゴーストタウンに・・・。
呪われた街が見つかって喜んだはいいけど、そのことを忘れていた。
僕とカイは、喜びを表現した表情のまま、ごくりと生唾を飲み込んだ。

そして、ふいにヒロちゃんとネイサンの向こう側にファシジュの都が目に入る。
遠目に見えるそれは、さっきまでは何とも思っていなかったはずなのに、ネイサンの話を聞いてから改めて見ると、どうにもおどろおどろしい様な、なんとも言えない不気味な雰囲気を放っているではないか。
「・・・・エヴァ。」
カイも僕と同じように思っているのか、なんとも頼りなさげな声で僕を呼ぶ。
ここは、お兄さんの僕がしっかりしなくてはと、僕は不安そうに揺れるカイに、いつかヒロちゃんが僕にそうしてくれたようににっこ

り笑って、背中をぽんぽんと叩いてやった。

「大丈夫。僕とヒロちゃんが一緒に行ってあげるから。」

にっこり笑う僕に、カイはそこでやっと笑顔を見せてくれた。

まあ、僕も怖いんだけどね。

僕は、心の中でこっそり苦笑した。

第六話　恐怖！骨人間現る。（後書き）

やっぱり、もともと短めに話を進めようとすると、展開も早くて、ちゃっちゃと話が進みますね。本編とはえらい違いです。でも、それに反してこんな話でも読んでくれる奇特な読者様に言葉足りない部分や、分かりにくところがあったりしたら、本当にすみません。それは、全部私の力が及ばないためです。

余談ですが、ファンタジーと銘打ちながらあんまりそういう部分が出てこないんですよね、私の話って。今回はそのあたりを少し意識して骨人間（笑）を出してみました！（もっと夢のあるモノでも良かったとは思うんですが）エヴァとカイは、ひどく怯えていますが、まあ、骨が動いて話しているんですから、子供としては正しい反応ですよね。私は書いていて楽しかったのですが（笑）

第七話　骨人間たちの街

カタカタカタカタカタ・・・・。

僕はその異様な光景に、涙すら浮かべたよ。

カタカタカタカタカタ

絶対に夢を見る。

しばらくは、この悪夢で僕は魘(うな)され続けるに違いない。

その度に、ヒロちゃんにからかわれるかと思うと気が重いけど、

僕はそんな確信を抱いていた。

カタカタカタカタカタ

だって、

カタカタカタカタカタ

こんなに

カタカタカタカタカタ

たくさんの骨人間たちの目玉のない空っぽの瞳に見つめられるなんて、誰だってその怖さに耐えられるわけないでしょっ？！

大体、骨同士が軋(きし)むカタカタカタカタカタカタって音が、いい加減鬱(うつ)陶(とう)しいんだよ！！

僕は（心の中だけで）そう絶叫していた。

第七話　骨人間たちの街

「・・・本当に、私たちのことを外で話さないと約束してくれるんですね？」

ファシジュの都に入る一歩手前で立ち止まると、辿(たど)りつくまでしつこいくらいに聞いてきた質問を、また骨人間ことネイサンは繰り返した。

「しつこいぞ。心配しなくても、私たちは不死の体なんて興味はない。私たちはニールティアーという人に会いに来ただけだ。大体、外でこんなこと話しても誰も信じやしない。」

それに対して、ヒロちゃんはこれまた同じ答えを繰り返す。

その答えを聞いてネイサンの表情があるはずもない、骨の顔がこちらをじっと見つめる。

目玉のない空っぽの瞳は、不気味で無機質で僕には恐ろしさしか感じられないけど、ヒロちゃんはそんな僕を背に庇(かば)いながら、その瞳を逸(そ)らすことなく見返している。

お人好しで小心者のくせに、こういう時のヒロちゃんは本当に頼りになって、カッコいいんだ。（本人には絶対言わないけどね）

そして、ヒロちゃんが答えて少しの沈黙の後、ネイサンがやれやれといったように溜息をつく。（だから、何で肺がないのに息が吐けるんだ？）

「分かりました。じゃあ、とりあえず、こちらです。」

半ば諦(あきら)めたようにそう言って、そうしてやっとネイサンは僕らは

都の中に招き入れてくれたんだ。

「都の中は別に普通の亡国(ドルガバ・チェシエ)の廃墟と変わらんのだな。」

「まあ、私たちは死なずに済んだんですが、別に街自体が終焉(ディルト・ヴェ)の宣告(ネス)を免れたわけではないですから。」

「なるほど。それも、そうだな。」

以上が、都に入ったヒロちゃんとネイサンの会話。

なんとも淡々とした会話をしているけど、こんな風にネイサンと平然と会話を続けるヒロちゃんの神経を僕は疑う。

確かに都の建物は、僕も見たことがある亡国(ドルガバ・チェシエ)の廃墟と大差ないよ。

壊れかけ、崩れ落ちそうな建物、あまり見かけないようなデザインや鉱物で造られている何だかよく分からないオブジェ。

まあ、確かにそんな様子は他の亡国(ドルガバ・チェシエ)の廃墟と変わらないように見えるね。ヒロちゃんが言うように。

でも、でもだよ?

ヒロちゃんの背中だけを見ている視線を少しだけ横にずらせば・・・

建物から、こちらを覗(のぞ)いている無数の骨人間。

これのどこが普通だっていうの?!

こんなにたくさん骨人間がいるなんて思っていもみなかったし、こちらをじっと見つめている骨人間たちの感情など分かるわけないけど、どう見たって友好的な雰囲気じゃない。

更に何処からともなく聞こえるカタカタカタと骨の鳴る音しか聞こえない都の雰囲気は、正にゴーストタウンとしか言いようがなくて、僕の恐怖心を一層駆り立てる。

これで、あんな風に平然としていられるなんて、絶対可笑(おか)しいで

しょ?！
ヒロちゃんが何と言おうと、僕は声を大にして言うよ！（とりあえず、無事にこの都を出たら）
そんな風に不満と怯えが入り混じったような複雑な思いを持ちながら、ネイサンと横並びになって歩いているヒロちゃんの背中だけを見ていると服の裾が引っ張られる。
「エヴァ、僕たち生きて帰れるのかな?」
カイも不安そうだ。（なのにヒロちゃんは都に入ってから、僕らを全く顧みようとしないし）
僕だって聞きたいくらいだけど、見上げてくるカイの目が涙交じりなのを見て、とりあえず元気づけるようにいってやる。
「大丈夫だよ。ヒロちゃんの性格からして、何の採算もなしに、こんな怪しげな場所に入らないとは思うし、それにニールティアーに会うためだよ。」
「うん。それはそうなんだけど・・・。」
分かるよ。それでも、怖いものは怖いよね。
さっきまでの僕ならこれにイライラして怒鳴ってたかもしれないけど、まあ、僕の方がお兄さんだしと思い、引きつっているとは思うけど笑顔を浮かべて、頭をぽんぽんと撫でた。
それ以上は、慰めの言葉は言わない。
だって、カイを安心させる言葉が何一つ思いつかなかったから。
今の僕とカイは、ヒロちゃんを信じるしかないんだ。
「・・・そういえばさぁ。」
これ以上色々考えていると怖いばっかりだと思い、気分転換に僕はカイと会話をすることにした。
そっちの方が、カイも気が紛れるかなと思ったもある。
「なあに?」

カイもそれに乗ってくる。（ただ、お互い視線はヒロちゃんの背中を見ていて、他は怖くて見れていない）
「そのニールティアーっていう天女に会って、何をするつもりなの？」

僕とヒロちゃんは、カイが呪われた街でニールティアーに会いたいという話は聞いていたけど、そういえば、彼がその天女に会って何をするかなんて聞いていなかった。
まあ、こんなに早く呪われた街が見つかるなんて思ってなかったし、その事情を聞いた時はカイが泣きわめいていて、それ所じゃなかったというのもあって、なんか有耶無耶（うやむや）になっていたんだ。
大体、こんな骨人間を大量生産している天女に一体どんな用があって、どこでその天女のことを知ったのだろう？
この骨人間たちは、これほどまでに外に自分たちのことが知られまいと気をつけて、現に千年も方法はともかくとして、その秘密を外に漏（も）れないようにしてきたんだ。
それをどうして、カイは知っていたのだろう？（聞く前は別に気にならなかったけど、聞いているうちに段々不思議に思う気持ちが強くなってきた）

「あれ、言ってなかったっけ？」
だけど、カイの方はあっけらかんと僕の質問に答える。
「えっとね、ニールティアーからディルヴァ・トゥ・マジスを返してもらうの。元々、それは僕のご先祖様のものだから。それでね、ぼーーーーーー」

ガシャン

カイはまだ何か言おうとしてたけど、さっきつけ方が甘かったのかネイサンが頭を落とした音によって、それは遮（さえぎ）られた。

僕らはその音にビビってしまい、会話の途中だったけどヒロちゃんの背中にすぐに隠れた。
「何だ、どうかしたのか？」
ヒロちゃんが聞く。
その言葉に地面に落ちたままの頭が、カタカタと動きながら言葉を発する。
「そ・・・ちらのお子さん、い・・・今、何ていいました？」
ネイサンが乾いた声を出す。
どうにも様子が変だ。
「・・・え？あ、うん？」
カイもいきなりそんな風に言われて戸惑うというか、それに怯えいている。
だって、相手は骨人間。（しかも頭はとれているし）

「カイ。」
でも、そんな妙な雰囲気の中、ヒロちゃんの優しげな声がカイを呼ぶ。
「何か言ったのか？心配いらないから、話してみろ。」
ネイサンをカイの視界から見えないし様にしてやって、カイに目を合わせてヒロが微笑む。
それに安心したのか、カイがさっきの言葉を思い出しながら話す。
「あ・・のね。エヴァがニールティアーに会ってどうするの？って聞いたから。」
僕の視界には、頭をくっつけようとして、手元が狂って失敗しているネイサンが映る。
表情がある訳じゃないから、よく分からないけど、それが僕にはまるで、何かに焦っているか、動揺しているように見えた。

一体、どうしたんだろう？

「ニールティアーから、ディルヴァ・トゥ・マジスを返してもらうのって――――――」
しかし、またしてもカイの言葉は最後までいくことなく、ネイサンによって遮(さえぎ)られた。
「ディルヴァ・トゥ・マジスッ！！！！」
今度は、彼の奇声みたいな声によって。

カタカタカタカタカタカタ

そしてそのネイサンの奇声が上がった途端に、周囲から鳴り響く骨と骨が当たる音が都を支配した。
さっきまでの、何処からともなく聞こえるような薄い音じゃない。
まるで、こちらを威嚇するような強い、そして数も増えたような音が、ファシジュの都に鳴り響く。
「ディルヴァ・トゥ・マジス・・・、何だそれは？」
異常の原因を探ろうとカイとネイサン、二人にヒロちゃんが尋ねる。
ただ、ヒロちゃんもこの異様な状況を警戒して、二人に尋ねながらも左手に持っていた剣を利き手に持ちかえた。
僕もそれに従って背中に背負っているライフルを、そうっと自分の手に持つ。

「あ・・・それはーーー」
カイがヒロちゃんの言葉に何かを言おうとするけど、いつの間にか首を体に付けていたネイサンがカイの首に掴(つか)みかかった。
「あれを知っているのかっ！？やはり、お前はあいつらの子孫なのだなっ！？あれを奪うことは許さな――――――」
しかし、ネイサンの言葉もまた言い終わることなく空気に散った。

ガシャッ！！

何故なら、ヒロちゃんが剣を真横に振って、再びネイサンの首から下の体を吹っ飛ばしたから。

体は衝撃でばらばらとなり、再び頭もゴロゴロと転がる。

さっきの不浄の大地（ディス・エンガッド）で彼と初めて会った時と同じような光景が再現される。

二度目だし、一度目ほどの衝撃はないけど、いきなりやられるとビビっちゃうよ。

でも、今は怖がっている場合でもないので、僕は倒れこんだカイを起こしてやる。

「エヴァ。」

「え？」

僕の名を呼びながらヒロちゃんが剣を抜いて、柄をベルトに挟む。

視線は僕らに向いていない、油断ならないようにあたりを見回している。

カタカタカタカタ

音は鳴りやむどころか、もっと大きく鳴っている気がする。

「・・・走るぞ。お前はカイを守れ。」

「ちょ・・・・。」

僕が状況を把握する前に、駈け出すヒロちゃん。

慌ててカイの手を引いて、僕もそれに続く。

そして、その後ろから首だけのネイサンの声が追いかけてきた。

「そいつらは、俺達の命を奪いにきた悪魔だぁっ！殺せ、殺せぇ！！！」

ガタガタガタ・・・・ガダッ

その声に呼応するように、一層大きくなる音。
建物に隠れて、こちらを窺っていた骨人間たちが出てきて、こちらに空洞の瞳の中を一斉にこちらに向けた。
空っぽの瞳のはずなのに、どうしてかその瞳に殺気を見つけることができるのはどうしてだろう？

『私たちの命を奪うものを、ころ・・・せぇぇぇっ！！！！！』

そして声を上げて一斉に襲い掛かってくる。
僕はその情景に、自分が絶体絶命であることを察した。

急に、何がどうなっているのっ！？
カイの言葉が引き金になったのは間違いないけど、それにしたってこんなに骨人間たちが襲いかかってくる理由が分からない。
カイも同じようで、ただただ目を丸くしいる。
でも、今はそれを探っている時間は、どう見てもない。

そんな混乱しかしていない頭で、ただヒロちゃんの背中だけを追った。
骨人間たちが追ってくる気配がするけど、それを見ても怖いだけなので僕はただただヒロちゃんの背中しか見ないようにした。

だって、どうせ、僕にはそれしかできない。
でも、それが、ヒロちゃんの背中に隠れていることが、逃げることが、一番安全だって僕は知っていた。
それが、どんなにみっともないことでも、生きていくためにはそれでいいのだと、ヒロちゃんに教えてもらっていた。

だから、僕に迷いはなかった。

第七話　骨人間たちの街（後書き）

ついに呪われた街・ファシジュの都に到着ですが、いきなり骨人間たちが襲ってきましたねぇ。さて、この後、どうなるか私もドキドキです（笑）

後半部分に差し掛かり、だんだん色々分かってきましたが、まだ分かっていない部分も多いですよね。後４．５話といったところですが、頑張ってまとめられたらいいと思っております。山はあと２つくらいです！

第八話　実は強いんです。

ヒロちゃんは強い。

それは、例えば力が強いとか、すごい剣術を持っているとかじゃなくて（まあ、それもあるんだけど）、僕が一番強いと思うのは、ヒロちゃんのその生命力。

ヒロちゃんは、ともかく生きようとする執念が強いんだ。（その生命力は、まさにゴキブリ並）

だって、相手が獰猛（どうもう）な怪物だろうが、多勢に無勢で襲いかかる夜盗だろうが、ヒロちゃんは一度だって負けたことがない。

でもそれは全て剣で、力で敵を切り伏せて、勝ち続けた訳じゃないんだ。

逃げて、逃げて、逃げまくり、命からがら助かったことだって、正直少ないとは言えなかったりして・・・。

それが、みっともないんじゃないかと、かつて僕が抗議してみたことがあったんだけど、ヒロちゃんは、それでいいんだと僕を窘（たしな）めたことを今でもよく覚えている。

『いいか？こんな世の中、力で勝つなんて意味がないことなんだ。生きるか、死ぬか、それが全て。生き残った者が勝者だ。』

そういって、僕の頭を乱暴に撫（な）でてヒロちゃんは笑った。

その笑顔は僕が見たことがない、色々な感情が入り混ざった笑顔だった。

ヒロちゃんがそんな顔をする理由を、僕は最期まで知ることはな

い。

第八話　実は強いんです。

骨人間たちが一斉に声を上げ、気がつけばどこから湧いて出たか知らないけど、数えきれないくらいの骨人間が僕らを囲んでいた。
ただ、向こうもこちらを警戒しているのか、囲んだまま距離を置いて、こちらを見つめている。
それでも、３６０度骨人間に包囲されてしまっては、逃げ出しようもなくて、僕はヒロちゃんの背中に張り付いて震えるカイを抱きしめて、自分も極力骨人間たちを見ないように、カイの艶々（つやつや）の黒髪に顔を埋める。

「しねぇ！」
「ワシらから、命を奪う者は誰であろうと許さないっ！」
「殺せぇ！！！」

だけど、骨人間たちはそんなわずかな現実逃避も許してはくれなくて、憎悪のこもった声が、僕の恐怖を煽（あお）る。
骨人間というだけでも僕には足が震えるに十分なほど恐怖なのに、こんなにたくさん、しかもどうみても僕らを殺そうとしている状況なんて、ヒロちゃんの拳骨（げんこつ）よりも、時々見る思い出せない悪夢よりも怖くて、ただ怖くて、僕はカイを抱きしめているのか、カイも纏（まと）わりついているのか、その感覚すらあやふやだ。
いっそ、これを夢だと思い込んで、気でも失えれば楽かもしれない。

いつもみたいにヒロちゃんと二人、僕が守られるだけみたいな状況だったら、僕はもしかしてそんな楽な方法で、ここから逃げ出していたかもしれない。
それでも、ヒロちゃんが僕を守ってくれるという確信が僕にはあるから。
でも、今は僕の胸の中で震えている僕より小さい存在がいる。
そう思うと、恐怖で遠のきそうな意識が、少しだけはっきりするような感覚を覚えた。
ついさっきまで、ヒロちゃんを挟(はさ)んで気まずい相手だったはずだけど（僕が一人で勝手にだけど）、やっぱり僕にはカイを見捨てることなんてできないんだ。
僕をこんな風に頼ってくれる存在なんて、今までいなかったから。
だって、これまで僕はヒロちゃんに守られているだけだったから。
（ライフルも持たされていたけど、本当は試し撃ちをしたことしかない）
それでいいと思っていたし。
それが、僕だと思っていた。・・・何の疑問も抱かずに。
でも、カイが、ヒロちゃん以外の他人が現れたことで、僕の中で何かが変わろうとしていた。
僕はヒロちゃんに守られるだけで、いいのかな？

「エヴァ。」
でも、そう思ったからといって何をしていいか分からなくて混乱する僕に、ヒロちゃんの声がかかる。
僕はヒロちゃんを見上げる。
ヒロちゃんの目には僕は映っていない。
ヒロちゃんは、ただ周囲を油断ならない瞳で見つめていた。
僕みたいに怯えて、オロオロしているだけじゃない。

ヒロちゃんはこの最悪の状況を如何にして切り抜けるか、それだけを考えていた。

「私の後に死んでもついてこいよ。」

「・・・へ？」

「カイも空は飛ぶなよ。上にも骨人間がいるからな、飛ぶにしても高くは飛ぶな。それから私から離れるんじゃないぞ。」

そう言われて、ふいに見上げた視線の先、建物の上にわらわらと骨人間の影が動くのが見えた。

あんな所まで。

だけど、状況についていけていない僕とカイを置いて、状況は悪化の一途を辿(たど)っていく。

「・・・来るぞ。」

ヒロちゃんの低い声。

「へ？」

「う？」

僕とカイの間の抜けた声。

そして・・・

『きぃぃぃぃっ！！！』

ガタカタガタッカタカタタッ

骨人間たちが、声を上げながら３６０度から、いや上から、そして地中の下から、一斉に飛びかかってきたのだ。

次の瞬間に、腕や足、髪の毛を掴(つか)まれる強い力、僕らを殺そうとする強い意思が僕たちを押しつぶす。

怖いっ！

殺されるっ。

そんな絶望とパニックが入り混じった感情が、頭の中でぐちゃぐちゃになる。
もう、何が何だか分からなくなって、ただただ襲い来るものを受け入れるだけで、自分からは何一つ行動できない。
痛いのか、苦しいのか、そんな感覚すら混乱で分からなくなっている中、そんな息ができないくらいの圧迫感が、僕の上から消えた。

「っ！？」
蹲(うずくま)っていた僕が顔を上げると、ヒロちゃんが剣で僕にのしかかっていた骨人間を振り払ってくれていた。
でも、そんなのは一瞬の苦し紛れにすぎず、すぐに次の骨人間たちが襲いかかってくる。
「ったく、しつこいんだよっ！」
それでも、ヒロちゃんは諦(あきら)めることなく骨人間たちを振り払い続ける。
僕も初めて実戦で使うライフルで応戦するけど、向こうは数でこちらを圧倒しているのに加えて、疲れ知らずのまさに化け物軍団。
こっちは、実質まともに戦えるのがヒロちゃんだけだし、いくらヒロちゃんが強いと言っても、それにだって限度がある。
次第にヒロちゃんの肩が上下して、疲れていく様子がうかがえて僕は何もできない自分が不甲斐(ふがいな)無くて泣きそうだった。

これがもし、ヒロちゃん一人であるなら、ヒロちゃんはこんなに大変じゃないはずなんだ。
僕らを守りながら戦っているから、こんな風に防戦一方で、逃げることすらままならない。
こんな状況になって僕は初めて、自分がヒロちゃんにとってただのお荷物であることを認識した。（今までは、こんなに絶体絶命の場面はなかったんだ）

守られるだけのことに慣れ過ぎた、僕のあまりに遅い認識だった。

そして、ヒロちゃんの隙(すき)をついて、ガブリと骨人間がヒロちゃんの肩に噛みつく。

「っ！」

僕はヒロちゃんに駆け寄ろうとするけど、骨人間に足を取られて動けない。

僕は足を死に物狂いで動かしたり、カイが何とかその骨人間をどかそうとしてくれる。

でも、そうこうして骨人間を引っぺがすのに手間取っている間に、僕らを殺す前に強いヒロちゃんに狙いを集中した骨人間たちにのしかかられてヒロちゃんの姿が見えなくなる。

このままじゃ、ヒロちゃんがっ！

僕はもう何が何だか分からないまま、無我夢中で骨人間をかき分けて、ライフルを振り回した。（銃弾は残っていないから、本当に振り回していただけだ）

「ヒロちゃんっ！！！」

でも、無力な僕はヒロちゃんを助けるどころか、僕とカイもどんどん骨人間に埋もれていく。

このまま、僕らは殺されてしまうの？

そんな最悪なシチュエーションが頭をよぎった瞬間だった。

視界一杯に広がった光・・・、黒い光。

そして、僕やカイの上にのしかかってきた骨人間どころか、僕らまでも吹っ飛ぶような衝撃が、ヒロちゃんの上にできていた骨人間の山を中心に爆発する。

僕は咄嗟(とっさ)にカイを抱きしめ、そのまま骨人間たちと一緒に吹っ飛

ばされ、地面に叩きつけられた。
「・・・ぐふっ！」
「エヴァっ、大丈夫？」
痛みの余り動けない僕の腕の中からカイが、もごもごと這い出て僕を見やる。
「う・・・うん。それより、ヒロちゃんは。」
僕は痛む体をおして起き上がると、すぐにヒロちゃんを探した。
周りには、バラバラになった骨人間の骨が散乱して、先ほどまでの騒然としていた空気が一変して静まり返える。
そして、特にそのバラバラになった骨が山積みになっている、まさに地獄絵図のようなその景色の真ん中に立っている一つの人影。

・・・よかった、ヒロちゃんも無事のようだ。

「今のはヒロちゃんが、やったの？」
だけど、その様子を見てカイが茫然としている。
「そう。あれはヒロちゃんの力だよ。」
そりゃ、あんなすごい力をまさかヒロちゃんが持っているなんて思わないよね。（ヒロちゃんには悪いけど）
ヒロちゃんが持つ剣から放たれる黒い光とその破壊力。
その人間が持つには不釣り合いとも思える力を前にすれば、カイも驚くか。（そういえば僕も、あれを初めて見た時は驚いた。）
「あの剣・・・？」
さっきまで、銀の刀身であったものが黒く染まっているのに気がついたのか、カイがぽつりと言葉を漏らす。
「あれは黒の剣っていう、ヒロちゃんの愛剣だよ。僕もよく知らないけど、今見たとおりすごい力を秘めている剣さ。」
僕は詳しく説明してやりたかったのは山々だけど、とりあえず今はそういう場合じゃない。
僕はカイを起こしてやって、ヒロちゃんに駆け寄った。骨人間は、

バラバラになってぴくりとも動かない。
どうも、あたり一面にいた骨人間を全部一掃(いっそう)してしまったみたい。
「エヴァ、カイ、大丈夫だったか？」
ヒロちゃんは僕らに気がつくと、すぐに声をかけてきた。
「うん。ヒロちゃんこそ大丈夫なの？」
「まあ、ほどほどにはな。二人は怪我はないか？」
僕らは軽い打撲くらいで怪我とは言えないようなものだけど、よく見ればヒロちゃんはさっき骨人間にかみつかれていた肩から血が滲(にじ)んでいる。
「ともかく、一端この街から逃げるぞ。まさか、こんなに骨人間どもがいるなんて、想像してなかった。あいつらもここから離れれば、追ってこられないらしいからな。」
そう言って、僕らを促してファシジュの都をさっさと出ようと僕らはするけど・・・

がちゃ、がちゃ、かたかた・・・・ガシャンッ

音を立てて骨たちがひとりでに動き出し、次々に骨たちが空中で繋ぎ合わされ始める。
「っち。」
復活し始めている骨人間たち。
それを見て、ヒロちゃんが行儀悪く舌打ちをする横で、僕とカイは恐ろしさに互いに手を握り合う。
「うそぉ。」
「エヴァ・・・。」
そりゃ、ネイサンの様子を見てたから、骨をバラバラにされたぐらいじゃ死なないのは分かってるけど、だからってこんなに早く復活しなくてもいいじゃない！

「うわぁっ！」
そんな混乱する状況の中、カイが叫びを上げる。
「カイ？！」
どうしたものかとヒロちゃんと二人でカイを見やると、カイの小さな足を手の部分だけの足が掴(つか)んでいる。
僕はもう恐怖など吹っ飛んで、ほとんど反射的にその手を踏みつけてやると、カイからはぎ取った。
骨は粉々になった。
だけど、まだ体が見つからないのか無数の手や頭蓋骨が、こちらにカタカタとあの音を響かせてやってくる。

「もう、嫌だぁっ！！」
「お・・・おかぁさ・・・ん。」

もう、最高潮に達した恐怖。
ヒロちゃんはそんな僕らを庇(かば)いながら、迫りくる骨人間たちを睨みつけながら再び先ほどの攻撃を仕掛ける気なのか、黒の剣(ローラレライ)を顔の前に構える。
そして、それを振りぬこうとして僅かに腰を落としたヒロちゃんだったけど、新たなる展開が訪れたことにより、その動作は中途半端なままに止まることになる。

「おやめなさい。」
凛(りん)とした女性の声が、騒然としたゴーストタウンに響く。
そしてその声に骨人間たちが操られるかのように、大人しくなり、僕らから波が静まるように遠ざかっていく。
「ヒロちゃん、これって・・・。」
「まあ、とりあえず助かったというところか？」
いいながらヒロちゃんも油断なく、その人を見た。

だって、骨人間しかいないと思っていたはずの街で、僕らはどう見ても生身の生きている女性を目の前にしたのだから。

はたして、この女性はだれなんだろう？

第八話　実は強いんです。（後書き）

いつも、エヴァにさんざんお人好しとコケにされていますが、ヒロは『実は強いんです。』という話（笑）そして、エヴァがここにきて、やっと自分がお荷物であるという自覚をします。今まで、ヒロがこれほどの窮地に陥ることがなかったので、気がつく機会がなかったんです。ヒロはあれで、エヴァに甘い人なので、それを気がつかせなかったというのもあります。

さて、最後に現れた女性は何者か？次回を楽しみにしてください。

第九話　僕らが求めたモノは

その女性が現れた途端に、何かに取り憑かれたみたいに僕らに襲いかかっていた骨人間たちが、水をうった様に静まり返り、時が止まったか様に停止する。

「ヒロちゃん、あの女(ひと)は味方かな？」

骨人間を止めてくれて、僕らを助けてくれたんだ。（今の状況では、そう思いたいよ）

そんな希望的観測も含めて、僕を庇(かば)うヒロちゃんの背中に聞いたんだけど、ヒロちゃんは僕の問いには答えない。

その背中からは、骨人間たちと戦っていた時より緊張しているような気配がした。

第九話　僕らが求めたモノは

「そうですか。ニールティアーにディルヴァ・トゥ・マジスを返してもらいにきたのですか。そういうことでしたら、私が会わせて差し上げますよ。」

言いながらにこやかに笑う人は、長い髪を持ち、その髪は見たことがないような色合いで、白とも銀とも見えるような淡い光を放っていた。

肌も白く、体も細くて華奢(きゃしゃ)で全体的に儚(はかな)い感じがする女の人だった。

でも、何故だかその底が見えないような黒々とした大きな瞳だけ

は、妙にギラギラしていて、生々しい印象を僕に残した。
まあ、それも多分気のせいだとは思うけど、例えそういった印象があったとしても、彼女は間違いなく僕が今まで出会った女の人の中で一番綺麗(きれい)な人だという事実には変わりなくて、僕は普段見慣れていないその美しい人に、思わず見とれてしまう。

と僕らを助けてくれた女の人の話はとりあえず置いておいて、彼女の言葉と雰囲気から分かるように、骨人間に襲われて絶体絶命だった僕たちの状況は１８０度好転したんだ。
何しろ彼女は天女・ニールティアーの知り合いらしく、鶴の一声で骨人間たちを大人しくさせると、僕らの事情をきちんと聞いてくれて理解すると、快(こころよ)くニールティアーに会わせてくれると言ってくれたのだ。
僕とカイは大いに喜んだ。
ちなみに、現在その天女がいるという場所に案内してもらっている途中。
この女の人といれば、骨人間は僕らに近寄っても来るどころか、その影さえ見せない。
さっきの骨人間たちの豹変(ひょうへん)ぶりも気になるところだけど、とりあえず安心って感じ。
ビクビクしながら歩いていたファシジュの都も、今は堂々と胸を張って歩けているくらいだ。（ちなみに僕とカイが女性を挟(はさ)んで前を歩いていて、ヒロちゃんはその後ろをついてきている。あれから、何故かヒロちゃんは黙り込んだままだけど）

「昔、ニールティアーから聞いたことがあります。ディルヴァ・トゥ・マジスは、トルマシオという人物から借りたものだと。」
歩きながら、女性は自分の知っている情報を僕らに話してくれた。
「それ、僕のご先祖様だよ！」
ということは天女・ニールティアーというのが、カイの探してい

るニールティアーであり、ファシジュの都が『呪われた街』であることが、これで証明された訳だ。（これだけ、危険な目に遭って、実は違いましたみたいなオチがなくてほっとしたよ）

「ところで、そのディルヴァ・トゥ・マジス？ていうのは、そもそも何なんですか？その名前を聞いた途端に襲われたんですけど。」

ニールティアーは、僕らがいた反対側の街はずれにいるらしく歩いて３０分ほどかかると言われ、僕はこの際色々聞いておくことにした。（本当ならヒロちゃんが聞いていそうなものだけど、あれから本当に一言も喋らないし）

「それは仕方ないでしょう。ディルト・トゥ・マジスとは魔力を秘めた杖。ニールティアーの魔法により彼らは永遠の命を授かっていますが、その魔力の根源は実はディルト・トゥ・マジスであり、彼らの命はその魔力から半径１０キロメートル内になくては保たれないのですから。」

・・・それは、すなわちディルト・トゥ・マジスこそが、骨人間たちの命ということじゃないだろうか？

さらりと言われた言葉だったけど、僕はその事実に目を見張った。同時に、さっきの骨人間たちが僕らに襲いかかった理由も良く理解できた。（カイにそれを持っていかれたら、自分たちは死んでしまうのだから）

「カイは、そのディルト・トゥ・マジスが魔法の杖ってことは知ってたの？」

「うん。僕のご先祖様の杖だよ。でも、ニールティアーっていう人に貸してあげたんだって聞いてるよ。」

そういうカイに女の人が優しげに語りかける。

「ええ。貴方のご先祖様はこの街の人々を助けるためにニールティアーにディルト・トゥ・マジスを貸してくださったのですよ。」

女はそこまでいうと、僕に背を向けてカイに向きなおった。

「ところで、貴方はディルト・トゥ・マジスが彼らの命と知っても、それでもなお、ニールティアーにそれを返せと言うのでしょうか？そして、それはまた貴方のご先祖様の意に反することになるのではないのですか？」

僕から見える、女の人を見上げるカイの顔が強張(こわば)った。

女の人の声にカイを責めているような感じはしないけど、でも、言っていることは間違いなくカイを責める内容だ。

そういえば、僕とヒロちゃんはどうしてカイがディルヴァ・トゥ・マジスを求めているのかという所まで、突っ込んだ話はしたことがなかった。（何しろそれを求めてこの都を探していたってことも、さっき知ったばっかりだし）

人間にあんな形にしろ、永遠の命を与えるほどの魔力を持つ物騒(ぶっそう)そうな杖を、そもそもどうしてカイみたいな子供が欲しがるのだろう？

「・・・確かにそうかもしれないけど。僕はディルヴァ・トゥ・マジスを諦(あきら)めるわけにはいかないよ。」

カイの舌っ足らず子供っぽい声に乗せられたのは、きっぱりとした決意の言葉。

「それは、どうしてかしら？」

女の人は僕とは反対側にいるカイを見下ろしているために僕には顔は見えない。

「僕の帰りを待っていくれる人たち、たくさんの命がかかっているから。それを守るためには、絶対にディルヴァ・トゥ・マジスの力が必要なんだ。」

カイは女の人から目を逸(そ)らし、正面を向いた。

その横顔は、子供のくせに子供っぽくない真剣で、思いつめたようなもので、いつもフニャフニャしているカイの顔しか見たことなかった僕はどきりとした。

それに、折角女の人が快(こころよ)くニールティアーに会わせてくれると言

ってくれているのに、こんな言い方をして気分を損ねないか不安だった。（だって、骨人間じゃないから安心してたけど、ファシジュの都にいるってことはこの女の人だって、ディルヴァ・トゥ・マジスで永遠の命を得ている人なのかも知れないじゃないか）

「そうですか。では、ニールティアーにもその旨をお伝えください。」

だが、僕の予想に反して女の人はあっさりと引いてしまう。

ほっとする反面、僕は何となく違和感を覚えた。

「・・・あの。」

だから、僕はその違和感を早速口にする。（ヒロちゃんが疑問はすぐに解決しろって、いつも言っているし）

「はい、何でしょう？」

「ニールティアーは神様が遣わした天女なんでしょ？魔力を持つ杖がなくても、街の皆を助けられたりしないの？」

大体、カイは普通の人間なんだから、カイのご先祖様だって普通の人間なはずだ。（どうして、そんな杖を持っていたかは知らないけど）

天女がその普通の人間から借りた杖なしに、奇跡を起こせないなんておかしい話だよね？

だから、僕は何とか穏便にディルヴァ・トゥ・マジスを返してもらえないものかと知恵を絞ってみて提案したんだけど、それはあっさりと却下される。それも、思わぬ言葉で。

「無理ですよ。ニールティアーは天女などではなく、普通の人間なんですから。」

「え？でも、さっきネイサンっていう骨・・・じゃない街の人に、ニールティアーは神から遣わされた天女だって僕らは聞いたんだけど。」

そこ（ニールティアーが天女じゃないって所）から否定されるとは思ってもみなくて、別に僕が悪いことした訳じゃないけど僕の声は狼狽（ろうばい）しているように裏返る。
「それは、その人が誇張（こちょう）していったに過ぎません。ニールティアーは決して天女などではなく、ただの普通の人間ですよ。まあ、神の遣いというのは、あながち間違ってはいませんけどね。」
「どういう意味なの？」
僕の問いに女の人はにっこりと微笑む。
その微笑みは、彼女こそが天女様見たいに綺麗で、神々しくて、眩（まぶ）しかった。
「そうですね。少し話をしましょうか。」
彼女はつい最近の話のように気軽に話し始める。

それは、千年前にこのファシジュの都での話。
でも、千年の時を経て、僕らにはまるで神話にも聞こえる過去の話だった。

第九話　僕らが求めたモノは（後書き）

第九話まで更新完了です！１０話前後とかいいつつ、書いてみたら実は１３話にまでなりました。もう少しだけお付き合いただけると嬉しいです。次回は急展開の予定なので、この話を読んでいてくれている奇特な方はお楽しみください。（本当にこの話は読者の方が少ないので（笑）、ここまで行き着いた方は本当に私にとっては神様のような人々なんです！）

第十話　彼女は天女か、それとも魔女か。（前書き）

【注意】

この話には、一部流血表現があります。苦手な方はご注意ください。

第十話　彼女は天女か、それとも魔女か。

僕たちは天国にでも迷い込んだのだろうか？

僕たちは女の人に連れられて、今にも崩れ落ちそうな建物の入口を潜(くぐ)った。

そして、その先には見たこともない美しい世界があったんだ。

あまりに美しさに見とれて声が出ないのと同時に、僕は何故だか泣きたくなるような懐かしさを感じた。

おかしいよね？　見たこともない景色に懐かしさを感じるなんて・・・。

「すごい・・・一面、紫の花畑だっ。」

そんな風で茫然としている僕の横で、カイが感嘆(かんたん)の声を漏らす。

それを聞いて足元に揺れる、紫色の小さな存在に目を落とす。

僕はこの存在の名前を知らなかった。見たことがなかったんだ。

でも、花畑？

これが、花なの？

僕は充満(じゅうまん)する花のいい香りを吸い込んで、風に揺れる初めて見る花という存在に、そっと触れた。

それは、僕が触れたら壊れてしまいそうに小さくて、儚(はかな)げだけど、確かに僕の手の中で存在していた。

・・・何か、カンドーだっ！

だって、不浄(ディス・エンガッド)の大地は生命が育まない死の大地。

花っていう存在をヒロちゃんから聞いたことはあったけど、僕は本物を見たことはなかった。（ヒロちゃんは説明してくれたけど、

情緒を解さないヒロちゃんの説明ではイメージがわかなかったし）
でも、その美しさと感動に浸(ひた)っている暇もなく、僕たちの前を歩く女の人は、どんどん果てが見えない花畑の中をドンドンと進んでいく。
そして、花畑に入った途端(とたん)、それまで話をしましょうと言ったにも関わらず口を閉ざし続けた彼女が歌うように語りだした。
「話は千年前、神とそれに従う人間たちがファシジュの都を訪れたことに始まるのです。」

第十話　彼女は天女か、それとも魔女か。

ここは建物の中のはずなのに、果てが見えない永遠と果てがない紫の景色。
女の人はその中に溶けてしまいそうな雰囲気を纏(まと)って、僕らに話かける。
「千年前、人間と天使たちが戦い続けていた当時、神は自分に従う人間たちを連れて最後の決戦の場所である最果(ロシギュナス)ての渓谷に向かっていました。その途中にあったのがこのファシジュの都。」
神と天使も、最初の警告で戦いをやめた人間たちには粛清(しゅくせい)を下さなかったらしく、言い伝えによると今もエンディミアンと呼ばれ、神に従った人間たちは最後の楽園天使(フィリアラディアス)の領域に天使とともに生きていると言われている。（一方、神に従わなかった人間はアーシアンと呼ばれ、今もこの不浄(ディス・エンガッド)の大地で苦しみ生きて、神に罪を償(つぐな)っているとされているんだ）
『神に従う人間』っていうのは、このエンディミアンのことだと思う。

そいて、『最果ての渓谷』っていうのは、女の人が言っていた通り抵抗を続けた人間と粛清を加える天使たちが、最初で最後に直接対決をしたと言われている場所。

その戦いの勝敗は分からないらしい（要は記録に残っていないと言われている）んだけど、その直後に終焉の宣告がおこり神に従わなかった人間たちは無限の絶望に突き落とされた。（いつもは大して役に立たないヒロちゃんの講釈が、やっと役にたった）

「ファシジュの都は、当時『呪われた街』と呼ばれておりました。」

『呪われた街』って、カイが言っていた名前だ。

「何故なら、神がお怒りなる前に、ファシジュの都は人間同士の熾烈を極めた戦いの中で傷つき、それどころか疫病が蔓延していたのです。そして、疫病を恐れ周囲の人間たちが近づくこともなかった、まさに『呪われた街』だったのです。」

僕は骨人間がウヨウヨしているだけでも、十分『呪われた街』だと思うけど、深刻そうな話の間に茶々は入れない。

「どうして、そんな街に神様が？」

それよりも、戦いを続ける人間を罰しようとしていた神様が、わざわざそんな街に来る理由が分からない。

「さあ、私にもそれは分かりません。ただ、この街の人々は『呪われた街』。そう言われるまでに至ってやっと、自分たちの行いを悔いたのかも知れません。その懺悔に神が慈悲を与えようとしたのではないかと私は思います。」

花の豊潤な匂いが進むにつれて濃くなっていく、建物の中をいくら見回しても窓もないのに、何処ともなく流れてくる風は不浄の大地の乾いた風ではなく、程よい湿り気をもっていて、優しく僕の頬を撫でる。

でも、僕はここに入ってから、初めは美しさに圧倒されて気が付かなかったけど、何故だかずっと寒気にも似たものを感じていた。

その正体が分からないことが、怖い。

「そして、訪れた神を前に街の人々はひれ伏し、許しを乞い、助けてくれと哀願しました。どうか、この疫病の苦しみから解放して欲しいと。その疫病は人間たちに治せるものではなく、死に至るまでの期間が長く、その間、死の苦しみを与え続けるものでした。その疫病はまさに呪い。でも、それは人間たちの自業自得でもありました。だって、そうでしょう？それは人間同士の戦いの結果でしかないのですから。」

それは、そうかもしれないけど。

その言葉に引っかかるものを感じるのは、僕だけなのかな？

僕は沈黙を守り続けているヒロちゃんが気になった。

でも、ヒロちゃんが後ろにいる気配はしたけど女の人から目が離せなくて、後ろを振り向くことができなかった。

「しかし、それでも神は救いの手を差し伸べました。そして、神の力により疫病はたちどころに街から消えていったのです。呪いから解放され、人間たちは神に忠誠を誓い、自分の全てを神に捧げることを約束しました。」

はい。めでたし、めでたし。普通なら、話はここで終わりそうなものだ。

でも、まだニールティアーの話も、骨人間たちのことも、何も出てきていない。

僕たちは黙って女の人の話に耳を傾(かたむ)ける。

「喜びに沸き上がる街、しかし、その一方でひと組の兄妹が別れを惜しんでいました。それは、神につき従い街にやってきた人間の兄妹でした。兄はこのまま最果(ロシギュナス)ての渓谷に近づくにつれて厳しくなる戦いに体の弱い妹を連れてゆくことを避けるために、妹をファシジュの都に置いてゆくことにしたのです。」

「それが？」

僕が先を促すように聞くと、強風が吹いた。

舞い上がる紫の花びら、それからユラユラとゆっくりと花畑に降り落ちる。
そんな花びらたちが舞い降る景色の中、この世界に迷い込んで初めて女の人がゆっくりと僕らに振り向いた。
「ええ、それがニールティアー。そして、その兄が貴方のご先祖様トルマシオ。トルマシオはファシジュの都に一人残る妹の身の安全のためにディルヴァ・トゥ・マジスを彼女に渡したのです。」
ニールティアーとカイのご先祖様が兄と妹？
驚きの新事実に僕だけじゃない、カイもそれは知らなかったのか驚いた様に目を見開いている。
そんな僕らを、女の人はまっすぐに見つめてた。
黒い瞳。
まるで何もかもを塗りつぶすような強いその色に圧倒され、僕は恐ろしくて一歩二歩と後ずさりをした。その場を動かずに、女の人の視線から逃げようとしないカイを置いて。
後ずさりを続けていると、何かが背中に当った。
見上げると、それはそれまで全く存在を消していたかのようなヒロちゃんだった。
ヒロちゃんは僕には視線を落とさず厳しい顔で正面を見据(みす)えると、僕の肩を抱いて僕を自分の後ろに追いやると花を舞い散らせながら、荒い足取りで前に進んだ。
カイと女の人。二人が睨み合う場所へ。
「そう。トルマシオは、戦いが終わったら必ず妹の元へ帰ってくると約束をした。それまでは、街の人々に助けてもらい、このディルヴァ・トゥ・マジスの魔力を使い身を守るように彼女に言ったわ。」
ガラリと彼女の口調、雰囲気、声も全てが変わった様な気がした。

儚げで、薄いヴェールの一枚向こういるような、どうにも存在感が薄いような、遠いような気配たっだ。
それが一瞬にして、その瞳同様に圧倒的な物質量を持って僕らを圧倒するような、そんな強い力が僕の胸を押しつぶそうとする。

これは・・・何っ？

「・・・なのに、兄さんは帰ってこなかった。」

『兄さん』って、カイのご先祖様のこと？
じゃあ、まさか彼女が・・・。
追いついていかない僕の思考を、切り裂くような声高い叫びが停止させる。

「私はずっと、ずっと待っていたのにっ！！！」

叫び様、女の人はカイに襲いかかる。
カイの細い首を片手でつかみ、女の人はカイの小さな体を持ち上げた。
その顔は、悲しみとも怒りとも見える、暗い影の落ち、歪んだ色が見えていた。
「私は兄さんが待っていろというから、待っていたわ？千年も、千年よ？ディルヴァ・トゥ・マジスの魔力を使い、街の人間たちの助けを借りた。彼らの血肉を使って、こうして永遠の命まで手に入れて、私は兄さんを待ち続けたのよ？それも、これも兄さんとの約束を守るためな――――――ぎゃぁっ！」
女の人が、いや恐らく彼女こそがニールティアーなのだろう。その人が、言葉を言い終えるのを壊すように、悲鳴が上がる。
同時にカイの首を掴んでいた手首が切り落とされ、紫の花びらに真っ赤な血が飛び散った。

「きゃぁぁっ！私の手が、手がぁっ！！」

途端に狂ったように悲鳴を上げるニールティアー。
そして、その手首を切った本人であるヒロちゃんは、首を絞められた状態から解放されて咳(せ)きこんでいるカイの背中をさすってやっている。
僕もそこでやっと、はっとして動けるようになり、二人に駆け寄った。
「カイッ！大丈夫？」
「う・・・うん。」
カイは突然のことに驚いているようだったが、向けられた憎悪(ぞうお)に怯えているのかその小さな体が震えている。
カイの首には、くっきりと女の手の跡が残り、爪が食い込んだのか血がうっすらと滲(にじ)んでいる。
僕は何もできないくて、カイの手をぎゅっと握る。
僕も突如として現れた、ニールティアーの憎悪に押しつぶされそうだった。
花の匂いに混じる、悪寒を誘う何かはこれだったのだ。花の美しさに、僕はそれが見えていなかった。

「ヒロちゃん、これって・・・。」
「分かっているだろう。彼女がニールティアーだ。そして、彼女はこの街を救った天女などではない。自分の永遠の命のために、街の住人達全ての血肉を生贄(いけにえ)に捧げた魔女だ。」
ネイサンたちは感謝をしていた。
自分たちに永遠の命を与えてくれた彼女を天女と崇(あが)めたてまつり、今も醜く歪(ゆが)んでしまった骨人間としての生にしがみついている。
それは本当は、ニールティアーの完全なる永遠の命のための生贄(いけにえ)であるとも知らずに・・・。

「・・・魔女？」
それまで、狂ったように自分の切断された手首を見ていた彼女がヒロちゃんの言葉に反応した。
「誰が・・・、誰のせいでっ！！！！」
ニールティアーの怒りが、悲しみが永遠に広がる紫の花畑に、高く、強く、耳が、胸が痛くなるように響いた。

第十話　彼女は天女か、それとも魔女か。（後書き）

第十話、ついにこの話も佳境を迎えようとしております。これを書き始めようとした時は、まさかこの話に流血表現注意の前書をする日が来ようとは思ってませんでした。本当にほのぼのした話を求めていたはずなのに、あれ？みたいな（笑）色々妄想が駆け巡った結果なので、まあ、いいかとは思っています。

色々な事情によりしばらくこちらの更新に専念することとなりましたが、全十三話、あと三話と残り少ないですがお付き合い頂けると嬉しいです。

第十一話　黒い杖

「誰のせいでっ！」
叫んだニールティアーの姿は、天女というには禍々(まがまが)しい姿をしていた。
逆立つ髪は波立ち、瞳が血走り、切り落とされた手首は未だに血を流し続けている。ヒロちゃんが言うとおり正に、

魔女。

それは、もはや狂ってしまった女の姿だった。
でも、僕はその直後に、彼女が叫んだ言葉に違和感を覚える。
「どうして、どうして来たのっ！？今頃になって、知りたくなかったのに！！！」

彼女が何を言っているのか、僕には分らなかった。
その叫びが何を示しているのか、僕が知るのは全てが終わった後になる。

第十一話　黒い杖

僕らを睨みつけたままニールティアーが残っている手をかざすと、その中に一つの杖が現れた。
見る限り大した装飾(そうしょく)もない、何の変哲(へんてつ)もない棒状の杖。
彼女はそれに滴(したた)り落ちる自分の血をつけると、言葉を言い放つ。
「我を守れ、ディルヴァ・トゥ・マジス。」

言葉に呼応するように、ディルヴァ・トゥ・マジスは付着した血痕から黒く浸食されていくように染まっていく。
それは、まるで僕が何度か見たヒロちゃんの黒の剣と同じような光景。

「・・・まじかよ。」

それを見て茫然としている僕の耳に、面倒くさそうなヒロちゃんの声が聞こえた。
「ヒロちゃん、あれって・・・。」
「言いたいことは分かるが、今はそれを確かめている余裕はない。エヴァは、カイと後ろに下がっていろ。」
僕とカイの方なんて全く見ようともしないで、ヒロちゃんは張りつめた表情のままニールティアーだけを見ている。
ヒロちゃんのこんな切羽詰まった顔は、短い付き合いじゃない僕でも初めて見る。
ただ漠然とした恐怖しか感じない僕とは違って、ヒロちゃんは目の前のニールティアーに別のものを感じているのかもしれない。
同じものを感じられない自分が悔しかった。

僕がそんなことを考えている間にも、ヒロちゃんは黒の剣を黒く変えると、僕らを置いて前に出るとニールティアーに向き合った。
それに反応して、ニールティアーが敵意をむき出しにする。
「ディルヴァ・トゥ・マジスは渡さないわっ！兄さんが私を迎えに来るまでっ！！！何がご先祖さまよ！あんたなんかにっ！！！」
そして、黒い杖を、ディルヴァ・トゥ・マジスを振り上げる。

「出でよ、我が守護を司りしものっ！！」

ニールティアの言葉に呼応するように、揺れる花畑。

そして、地響きの後、紫の花の下からズズ・・・ズと音をたてて現われたのは、見たこともないほど大きな怪物・・・・の骨。

「な・・・何、あれ・・・・？」

全長は２０メートル以上あるんじゃないかな？

花を踏みつぶすように地面を踏みしめる四本の足には、僕らを軽く串刺しにでもしてしまいそうな長く、鋭い爪が付いている。

そして、長い尻尾（しっぽ）は太く、背中の翼からは強風が吹き荒れ、頭には一本大きな角があり、口には僕らを噛み砕かんと鋭い牙が待ち受けている。

骨じゃなきゃ、どんな怪物なのか想像もつかないけど、ともかく恐ろしいに違いないその姿に、ヒロちゃんに言われたとおり離れた場所で隠れているしかない僕は震えあがった。

それこそ、このまま失神できたらどんなに幸せだろうと、僕は本気で思った。

ギャギャギャァっ

上がる鳴き声は、離れている僕らの耳が痛くなるくらい大きく、眼の前にいるヒロちゃんを威嚇（いかく）するようだ。

不浄の大地（ディス・エンガッド）でも見たことがない怪物。

そんな怪物を前にして唖然（あぜん）として声も出ない、動けもしない僕を尻目に、怪物は前足を上げてそのまま踏み潰してしまおうとヒロちゃんに向かって前足を振り下ろす。

立っていられないくらいの揺れとともに、その衝撃で紫の花びらがそこらじゅうに飛び散った。

「ヒロちゃんっ！！」

叫んだ僕の目には、辛（かろ）うじてその攻撃を避けたらしいヒロちゃんが花の中に倒れこんでいるのが見えた。

あんな攻撃をまともにくらったら、いくらヒロちゃんだって一たまりもないに決まっている。あれで生きていたら、それこそ人間じゃないよ。
骨人間と戦った時と同様に、急に怖くなった。
そう思った瞬間、僕はヒロちゃんに向かって駈け出す。
ヒロちゃんが死んでしまうのではないかという恐怖が、眼の前の怪物に対する恐怖より勝ったんだ。
「来るなっ！」
だけど、ヒロちゃんはそんな僕の行動をその目で見ていないのに、見ているかのように僕に向かって叫んだ。
「でもっ！」
それでも、僕は食い下がる。
ヒロちゃんを失うなんて、僕には我慢できない。
どうして、こんな風に思うか理屈じゃ説明できないけど、そんなことになるくらいなら、僕は自分がどうなったっていい。
それで、ヒロちゃんの命が助かるなら・・・って、それくらいに、僕は真剣だった。
なのにヒロちゃんは、僕の言葉を聞いてくれない。
「邪魔だっ！お前を庇いながら戦うのは無理だ！！下がっていろっ。」
違う！僕は守ってほしいんじゃないんだ。
ヒロちゃんと一緒に戦いたい。一緒にいたいだけなんだよっ。
そう心の中で強く言い返すけど、ヒロちゃんの強い拒否に僕は体が竦み、言葉が出てこない。
言っている間にもヒロちゃんは怪物の攻撃を避けながら、それでも自分も黒の剣を使い、黒い刃を放って攻撃をしている。
でも、骨人間を一掃するほどの威力を持つ攻撃のはずなのに、頑丈な怪物の骨には通用しないのか、怪物には傷一つついていない。

それに、さっきの骨人間たちとの戦いで、ヒロちゃんは負傷していたはずだ。
僕の目にも、ヒロちゃんの動きにいつものキレがないのは明らかだった。

このままじゃ、本当に・・・。

僕は何もできない無力感に苛(さいな)まれながら、力なく紫の花の中に膝(ひざ)をつく。
どうしたら、どうしたらいいんだろう？
僕に何かできることは、本当に何もないの？？？
ヒロちゃんが、このまま、考えたくないけど、このまま万一のことでもあったりしたら、僕は自分を保っていられる自信がない。
悲しみと、苦しみに押しつぶされて、きっと僕は生きながらに死んでしまうに違いない。
だったら、ヒロちゃんにどんなに怒られてもいい。僕は・・・

「エヴァ。」
僕が一人ウジウジとしているいと、カイが僕のすぐ傍まで来ていた。
「大丈夫？」
「うん。僕は駄目だね。ヒロちゃんを助けたいと思っているのに、何もできないでいる。」
「・・・エヴァは、ヒロちゃんと赤の他人のはずなのに、どうしてそんなにヒロちゃんのことを？」
似たようなことを、そういえばカイに聞かれたことを思い出した。
あの時は混乱していて、自分とヒロちゃんの関係が自分でもよく見えてなくて答えられなかった。
でも、今なら答えられる気がした。

「他人とか、理由とか関係ない。僕にとってヒロちゃんといることには理由はいらないんだ。そのためなら、僕は何だって・・・するよ。ううん。そうしなきゃ、いけないんだ。」

今まで考えたことなかったけど、本当はずっとそう思っていたのかも知れない。

本当は、守られるだけじゃない。僕だってヒロちゃんを守りたいと思っていたということ。

一緒にいるためなら、何を失っても構わないと思うこの気持ち。

カイに言ったように、この感情に理由はないし、いらないと思った。

こんなことは、理性で制御できるものじゃないに決まっているはずだから。

でも、ヒロちゃんに心地よく守られて、僕はそれに気がつくことがなかった。

カイと出会い、そして、この都で絶対絶命のピンチに陥(おちい)って、やっと初めてそれに気がつくことができたんだ。

・・・でも、それはあまりに遅かった。

だから、僕は無力なまま、ヒロちゃんの戦いを見ているしかない。そんな自分が、本当に嫌だった。

「・・・そうだね。じゃあ、僕らにできることをしよう。ヒロちゃんを助けるために。」

でも、そんな僕に一筋の光がさす。

ぼんやりと見上げたのは、いつも僕やヒロちゃんの後ろで震(ふる)えているカイじゃなかった。

いつか見た、月光に光る緑がかった黒い瞳には、強い光が宿っていた。

それは、ヒロちゃんと一緒。戦うことを知っている者の瞳だと僕には分かった。
どうして、カイがこんな目をするのだろう？
「僕らにできること？」
でも、それより今はカイの言った言葉だ。
「うん。あんな化け物を相手に僕たちが出て行っても、確かにヒロちゃんが言うように足手まといにしかならないよ。でも、ほら見て。」
カイが声を顰(ひそ)める視線の先には、杖を振り上げて何事か呟き続けているニールティアーの姿が目に入った。
「あの化け物を呼び出してからも、ニールティアーはずっとああやって多分、呪文を唱えているんだ。多分、あの怪物を操るには、それが必要なんだと思う。」

そこまで聞いて、カイが何を言いたいか僕は気がついた。
「そうかっ！じゃあ、ニールティアーの呪文さえ止めることができたら。」
「うん。きっとあの化け物を止めることができるはずだよ。それで、作戦があるんだけど・・・・」
そう言ってカイが僕の耳元に顔を寄せて耳打ちをする。
それに、うんうんと頷くしかできない僕。
情けないかもしれないけど、今はカイの作戦に縋(すが)りつくことしか僕には何もできなかった。

第十一話　黒い杖（後書き）

という訳で、骨の恐怖がまだ続いておりました。その被害者はひたすらにヒロです。実はうちのヒロは、いつも苦労ばかりしているキャラです（笑）でも、今回は主人公のくせに、常に後ろに隠れているエヴァが活躍の兆し、結果ではなく兆しですが見せています。次はきっと活躍します。きっと。

追記ですが、『東方の天使　西方の旅人』を読んでいる方は、「あれ？」と思った方もいらっしゃるかもですね。ふふふ、さあ、あれはあれなんでしょうか？（『あれ』じゃ、分かんないですかね？）それは、また最後にでも少し説明できたらと思っています。

第十二話　人はそれを悲劇と呼ぶのでしょうか？

僕は紫の花畑の中を音を立てないよう、ニールティアーに気がつかれないよう、そろりそろりと近づいていた。

息を殺し、緊張で大きくなる鼓動がニールティアーに気がつかれないかハラハラしながら、僕は一歩一歩慎重に歩みを進める。

幸い、すぐ横では怪物とヒロちゃんがドンパチの最中、ニールティアーの意識もそっちに向いているのか、僕には全く気がつく気配もない。

凄まじい轟音、散り散りにされる花たち。

きっと、この戦いが終わった暁には、花畑の一角は削り取られたようになるに違いない。

そして、僕は一定距離ニールティアーに近づくと、ゆっくりと再び銃弾を込めたライフルを構えた。

緊張で口の中はカラカラに乾いていて、ごくりと生唾を飲み込もうとして咳きこみそうになった。（何とか、こらえたけど）

構えた銃口の先には、黒い杖を持ち、狂ったように何事かを呟いているニールティアー。

今の彼女は周りが見えておらず、ヒロちゃんと怪物との戦いに笑みさえ浮かべて見入っている。

僕とカイには、全く気が付いていないようだ。

それを改めて確認して、頭、顔、胸、様々に狙うべき場所はあるのだろうけど、僕はカイの作戦通りの場所に照準をあわせた。

ライフルの腕が大していいと言えるわけじゃない僕だけど、これだけは死んでも外すわけにはいかない。

しかも、チャンスは一回だけ。（一発撃ったら、きっとニールティアーに気がつかれる）

緊張は最高潮。
震える体で、ぶれる銃口。
何も考えられなくなった頭の中では、鳴り響いているはずの轟音も聞こえず、ただ自分の吐く息の音と妙に大きく早い鼓動の音だけ。
僕は僅かに息をとめる。
そして、ゆっくりと引き金を・・・引いた。

第十二話　人はそれを悲劇と呼ぶのでしょうか？

ガウンっ

銃声が一つ響く。
僕が放ったライフルの銃弾は、ヒロちゃんの教え方が良かったのか、僕に才能があるのか、はたまたその両方かもしれないけど、一発で狙いどおりに命中した。

それは、ニールティアーがディルヴァ・トゥ・マジスを握っていたその手。

既にヒロちゃんによって片手を切り落とされていた彼女は、僕の銃撃により黒き杖をはじかれ、高く上がった杖は空を飛んで上から彼女に近づいていたカイによってナイスキャッチされる。
カイの作戦は永遠の命を持つと豪語したニールティアーに対し下手に攻撃しても、きっと歯もたたないだろうと、その狙いを彼女の魔力の根源であるディルヴァ・トゥ・マジスに絞ったものだった。
あれさえなくなれば、きっとあの怪物の動きも、そしてニールティアー本人の動きも止められるのではないかと考えたんだ。（・・・カイがね）

作戦は見事に的中した。
ヒロちゃんに襲いかかっていた怪物は、杖がニールティアーの手を離れた瞬間にその動きを止めている。
それを確認して僕は小さくガッツポーズをして、カイとその喜びを分かち合おうとして彼を振り返った。
だが、それは佇(たたず)んでいるニールティアーをカイが注視しているためにかなわない。
さっきまで生きているかのように蠢(うごめ)いていた髪は、今は彼女の顔を静かに覆ってその表情を見ることはできない。
でも、動きが完全に止まっている以上、僕らの作戦はきっと成功に違いない。
そう改めて思って、僕がニールティアーを見たまま瞬(まばた)き一つしないカイに一歩近づこうとした瞬間だった。

「返せぇっ！！！！！」

突如カイに襲いかかろうとする彼女は先程までの美しい生身の女などではなくて、僕たちが見た骨人間と同じものだった。
あの暗い、底のない闇の瞳の奥に光る狂気。
かたかたとなる骨と骨がぶつかり合う音。
生身の時と同じなのは、彼女が身に纏(まと)っていた白い洋服と、異常に長い髪の毛だけ。
それはこの都に囚(とら)われ続ける骨人間たちと同じ存在にすぎない天女のなれの果てがあった。

長い髪を振り回しカイに飛びかかろうとする骸骨(がいこつ)の動きが、僕にはスローモーションで見えた。
このままじゃ、カイがニールティアーに殺される！
そう思うより早く僕は駈け出していた。

「カイッ！」
この時の僕は、もう頭が真っ白なままカイとニールティアーの間に割って入っていた。
「ドケェッ！！！」
ニールティアーから発せられる憎悪のこもった殺気は、僕が一度も経験したことがないくらい凄(すさ)まじい。
ここに来る前の僕だったら、すぐに逃げ出していたかもしれない。
でも、このままカイを見捨てることなんて僕には、今の僕には絶対にできない。

「エヴァっ！！」
ヒロちゃんの声が耳に届く。
ああ、最後に聞くヒロちゃんの声かもしれないなんて、頭の片隅(かたすみ)で思った。
そして、ニールティアーの手が僕の体を襲うその瞬間、鋭い刃(やいば)と化したその骨が僕の肌に当った感触がしたと思ったその瞬間。
僕の中から、誰かが僕に呼びかける声がした。

――――翼(エヴァ)、戻れ

声が聞こえた後からのことを、僕ははっきりとは覚えていない。
まるで、全部が夢の出来事のように、それから後のことを僕は自身の記憶として存在していないんだ。
ただ、何か熱に浮かされたような、そんなふわふわとした感覚の中で僕は誰かに操られて自分でしたことを、目の前で起こったことのように他人事として傍観(ぼうかん)している。
そんな言葉が、あの時の僕には相応(ふさわ)しいような気がした。

ニールティアーの骨の感触が僕に触れた瞬間、彼女は僕から弾(はじ)き飛ばされるように吹っ飛んだ。

同時に、強い白い光が僕を包む。
ニールティアーは、その光を恐れるように体を小さくして、蹲り叫びを上げた。
「やめてぇっ！！どうして、この神の力が・・・っ？！・・・この力はっ？！」
ぼんやりしている僕には彼女が何を言っているか、所々よく聞こえないけど、その光は紫の畑全体を覆い、動きを止めていた怪物も木っ端微塵に跡形もなく消し去った。
僕は視線の片隅で、それと茫然としているヒロちゃんとカイを確認して、それから骸骨であるニールティアーに僕は恐れも怯えもなく、一歩一歩近づいて行った。

自分でもどうして、そんなことをしたのか。本当に分からない。
いつもの僕だったら、パニックになってヒロちゃんにしがみついているはずなのに、その時の僕は自分から放たれる光が当たり前のものだと思っていて、そのまま紫の花に埋もれている骸骨を見下ろすことにも違和感を感じなかった。
そして、何の躊躇いもなく、僕はニールティアーの右足を踏みつぶしたのだ。
右足はまるで何かの焼けるような音と共に消えてなくなる。
それを見て、ニールティアーは恐れ慄いて、耳障りな悲鳴を上げんがらカタカタと花をかき分け、這いつくばって僕から逃げようとする。
ヒロちゃんもカイも、予想のつかない僕の暴走に目を見張っている。
しかし、この時の僕は妙な高揚感に包まれ、逃げ惑うニールティアーを追い詰めることをひどく楽しんでいたのを覚えている。
「・・・兄さん、助けてっ！助けてよぉ。どうして、来てくれないのっ！！！」

これが僕が聞いたニールティアーの人間らしい最期の言葉となる。
そして、それは多分きっと彼女の本当の心からの言葉ではないかと、後に僕は思う。

この街の全ての人間の血肉を犠牲にし、骨人間に囲まれながら生き続けたニールティアー。
彼女は永遠の命を求めた。
そして、それは結局のところ兄との約束を守るため、再び兄と会うためだった。
ただし誰かを犠牲にしてまで行われたその方法を、僕は絶対に許されるものじゃないと思う。
でも、その根底にはもう一度トルマシオに、カイのご先祖様である兄に会いたいという純粋な気持ちがあったはずなんだ。
彼女の狂気に隠れて見えなかったそれが、彼女の最後の言葉から感じることができた。

『どうして来たの?!』
それは、カイさえ来なければ、兄をずっと待ち続けることができたはずだという叫び。
『知りたくなかったのにっ。』
それは、カイという存在から分かる否定したかった兄の死を知りたくなかったという彼女の本音。

ああ、彼女は分かっていたんだ。
千年という歳月を経ても会うことができない兄。
きっと、兄は死んだのだと、もう待っていても自分を迎えに来てくれる存在など何処にもないということを。

でも、彼女は待ち続けた。

それが約束だから。
信じたくなかったから、信じてしまえば自分が何もかもを捨てて
まで得た永遠の命も、これまで待ち続けた人間には、あまりに長す
ぎる孤独な時間も全てが意味をなくす。
そんなの、考えるだけで気が狂いそうだ。
だから、彼女はカイという存在を消そうとした。
彼女が守りたいのは永遠の命ではない。

彼女が守りたいものは、自分という存在意義だったんだ。

後から思えば、彼女のそんな悲痛な叫びが、思いが僕には痛いほ
どに分かる。
想像しかできないけど、そんな風になったらそれこそ僕だって発
狂してしまうに違いない。
そう。後から思えば、そう思えるんだ。
なのに、あの時の僕。いや、僕じゃない誰かは、ありえない言葉
を彼女に向って吐いたんだ。

「馬鹿だね。呼んでも来る訳がないだろう？千年だよ？トルマシオ
は死んだ。あの戦いで、それこそ骨一つ残らない綺麗な死だった。」

僕は自分が何を言ったか覚えている。
どうして、こんなことを言ったのかは分からない。
僕はカイのご先祖様なんて知らないし、その死にざまなんて知る
はずもないのに、僕の口は勝手に動き、言葉を発していた。
「君はそれを否定したくて、ここで待ち続けたんだろう？でも、カ
イが来たことによって、それすらできなくなる。さあ、もういいだ
ろう？眠るんだ。兄と同じ所へ還れるんだ。良かったね。」
考えられないほどに無慈悲な言葉とともに、僕は彼女に向って手

をかざすと白い光を放ちニールティアーの全てを無に帰した。

・・・それからしばらく僕の記憶は全くない。

気が付いて、僕が目覚めた時には、ヒロちゃんとエヴァが僕をファシジュの都から連れ出した後だった。

僕の呪われた街での事件は、こうして終焉を迎えた。

僕の胸に、悲しみとやりきれなさと、僕という存在に対する疑問を残して・・・。

第十二話　人はそれを悲劇と呼ぶのでしょうか？（後書き）

エヴァ、活躍を通り越して暴走。そして、呪われた街での事件は終焉です。いやー長いような、短いような。（いや、話はまだ一話続いているんですが）

最終話は明日更新する予定です。

最終話　いつか迎える最期の日まで。

『還ることにしたんだ。』
『本当に大切な、大切な時間だった。』
『ずっと、ずっと一緒にいるよ。だから生きていて。』
『大好きだよ。』

・・・ああ、これは誰の最期の言葉だろう？

最終話　いつか迎える最期の日まで。

悲しい夢を見たような気がした。
目が覚めた瞬間に忘れ去ったその夢は、僕の中に切なさと優しさだけを残して消え去った。
「エヴァ、大丈夫か？」
瞳を開いたまま声もなく泣き続ける僕を、珍しく心配そうな顔をしてヒロちゃんが覗きこむ。その横にはカイがいた。
僕は二人を心配させないように笑ったつもりだったけど、それは失敗に終わった。

ヒロちゃんの話によると、僕はニールティアーを消滅させたと同時に気を失って倒れたらしい。
そして、倒れた僕は呼んでも揺すっても目を覚まさず、気がつけば１０日以上も眠り続けていたというのだ。
これには、僕も驚いた。（だって、そんな感覚は全くないもん）

でも、呪われた街・ファシジュの都にいたはずの僕がチューダスの街にいるのだから、１０日間も眠っていたというのは間違いはないんだと思う。
「お前重いから、何回不浄の大地（ディス・エンガッド）に置いていこうかと思ったぞ。ここまでおぶってやった私に感謝しろよ？」
ヒロちゃんはそう言って、変わらず僕を小突いたけど、
「ヒロちゃん、エヴァが目覚めないからって、すごい心配してたんだよ？それこそ、見ていられないくらいに取り乱してた。」
と、カイが後からこっそりと教えてくれた。
心配かけて、ごめんねヒロちゃん。

「それにしても、カイは目的が達成できてよかったな。これで、お母さんの所にも胸を張って帰れるってものだな。どうする、ヤウリーアまで送ってやろうか？」
呪われた街のこと、ニールティアーのこと、何故だか目が覚めた僕には意図的に二人とも話そうとはしないことに僕は気づいていた。
でも、あの街で起こったことは夢でも、幻でもない。
それは、カイの手の中にあるディルヴァ・トゥ・マジス。今は黒くない、あの杖が何よりの証拠だった。
それを持って、カイはヒロちゃんの提案に首を横に振る。
「ううん。大丈夫。迷惑しか掛けてない僕が言うのもなんだけど、これ以上は二人に迷惑かけたくないもん。」
「そうか。」
「・・・明日、僕はヤウリーアに向けて出発するね。エヴァが心配で付いてきたけど、このディルヴァ・トゥ・マジスを使って皆を助けないといけないんだ。」
ヒロちゃんは何も言わなかった。
ただ、カイの頭をぽんぽんと叩く。カイはそれをくすぐったそうに受け止めていた。

それを横になったまま見ながら、僕はぼんやりとカイと分かれるんだと他人事のように思った。
同時に、二人が僕に呪われた街のことやニールティアーのことを話さないのは、なんとなくあの時の僕が明らかにおかしかったことが理由なんだろうなと思った。
でも、それを追求するつもりはなかった。
二人が話さないことがその答えのような気がしたし、何よりその答えを聞くことが怖かった。

それを聞いたら最後、僕は僕ではいられなくなるような気がしていた。
夢の中でずっと誰かが僕を呼んでいた。
そして、その声は今も続いているような気がしてならないんだ。

そして、カイとの最後の夜。
最後なのにどうしてだかヒロちゃんは酒を飲みに行くといって、僕ら二人を置いて出ていった。（まったく、これだから悪い大人は！）
最後なのだから、別れを惜しむとかしなよと言ったんだけど、カイは笑っていいんだと僕に言う。
「エヴァが寝ている間に、たくさんヒロちゃんとはお話したから大丈夫だよ。むしろ、エヴァと色々話せるように気を遣ってくれたんじゃないかな？」
そうかなぁ？僕にはヒロちゃんが、そんな気の利いた気遣いをするとは思えなんだけど、カイがそういうのならと、そういうことにしておいてあげた。（僕ってば優しい）
「僕ね、ヒロちゃんにも感謝しているんだけど、エヴァにはそれ以上に感謝しているんだ。」

「え？僕、何もしてないよ？！」
ぽつりとつぶやいたカイの言葉に僕は焦ったけど、ベッドから起き上がるとカイは僕に向きなおって正座をすると、一つ深く頭を下げた。
僕はしどろもどろになって、飛び起きた。
「か、カイっ！？」
「本当にありがとう。エヴァは何回も僕を庇って抱きしめてくれた。ディルヴァ・トゥ・マジスを取り返すために協力してくれた。そして、僕のご先祖様の妹でもあるニールティアーを、そしてあの街の人たちを解放してくれた。」
カイの緑がかった黒い瞳。
同じ黒い瞳でも、ニールティアーとは違い何の力もない、でも、僕が吸い込まれそうになるほど澄んだ瞳に驚いている僕が映る。

「本当にありがとう。」

僕は何も言えなかった。
「ヒロちゃんはエヴァに呪われた街のことをあまり話したくないみたいだけど、僕はエヴァにお礼を言いたいから。」
「・・・うん。」
「あの後、骨人間たちはニールティアーの魔術が効力を失って、骨すらも残らずに消えてなくなったよ。」
「・・・うん。」
僕がやった。
僕じゃない僕がやったなんて言ったって、きっと誰も信じてくれないし、正直僕だって信じられない。
ただ、やらなきゃ、僕たちがやられていたし。後悔はないと思いたい。
でも、やっぱり彼らの事情を知ってしまうと、罪悪感が残らない訳なんて・・・ないよ。

「僕は自分のことしか考えてなかった。」
凹む僕の横で、カイがふいに言った。
「一族の伝説で、ご先祖様がニールティアーに渡したといわれる魔力を秘めた杖。それを返してもらえば、全部が上手く行くって思ってたんだ。そのことに何の疑問も感じていなかった。もともとは僕のご先祖様のものだし、返してもらって当然くらいに思ってたのかもしれない。」
「でも、カイにはディルヴァ・トゥ・マジスが必要なんでしょ？仕方ないよ。」
僕の言葉にカイが、子供には似つかわしくない自嘲（じちょう）の色を浮かべる。
「うん。でもね、僕はどうしてそんな大切な杖をニールティアーに渡したのかとか、その後、どういう思いで彼女がそれを持っていたのか。考えたこともなかった。」

『どうして迎えに来てくれないの、兄さんっ。』
聞いているだけで胸が詰まるようなニールティアーの最期の言葉。
僕ははっきり覚えている。

「それを知っててても、やっぱり僕は僕を待つ人たちのために呪われた街を探したと思うし、ディルヴァ・トゥ・マジスを返して貰っていたと思う。でも、きっともっと彼女に言葉を尽くしたかもしれない。方法を考えたかもしれない。」
「カイは僕より大人だね。」
ヒロちゃんが僕に言った言葉だった。
今なら、その意味が分かるような気がした。
カイは見た目も、力も、言葉遣いも子供だけど、こうして自分で考え、自分を待っている人のため精一杯のカイは本当に大人だと思う。

少なくとも、いつも自分のことしか考えていない僕よりは。ずっと。

「ううん。そんなことないよ。僕は結局何もできなかった。本当なら、ニールティアーと戦わないといけないのは僕だった。彼女とあの街の人を解放するのは僕の役目だった。なのに、僕は結局全てを、ヒロちゃんとエヴァに押しつけてしまったんだよ。・・・本当にごめんなさい。」

「・・・解放？」

僕は彼女たちを消滅させただけのはずだ。

「そうだよ。エヴァは来ない僕のご先祖様を待ち続ける、永遠の牢獄みたいなあの都の呪いを解いたんだよ。」

そんな風には考えられなくて僕は戸惑った。

でも、カイの表情は嘘を言っているようには見えない。

「だから、ありがとう。エヴァ。」

僕はその言葉に、やっと頷くことができた。

「じゃあな。気を付けて帰るんだぞ。」

「うんっ。」

ヒロちゃんとカイがそっけないけど、あれで精一杯であろう最後の挨拶を交わしている。

僕は寂しいような、でもまだ実感のわかない別れに違和感を感じながら相変わらず荒地しか広がらない味気ない不浄の大地（ディス・エンガッド）にいた。

ここから、僕らは別の道を行く。

「二人とも本当にありがとう。二人ことは忘れない。・・・また、

絶対に会おうね?!」
にっこりと笑うとカイの目には少しだけ涙が光っていた。
でも、そう言うと駈け出して、出会った時と同じように空高く舞い上がり、そして僕らが見送る中だんだんと見えなくなっていった。
僕も涙をためながら、カイが見えなくなるまで手を振った。
「カイ・・・大丈夫かな?」
「大丈夫だ。」
妙にきっぱりとヒロちゃんが言いきる。
「結局、最後まで謎が残るフライング・ベイビーだったね。」
カイが何者かも(どうみてもただの子供には見えなかった)、何処から来たのかも、ディルヴァ・トゥ・マジスを使って何をするのかも。
まあ、僕らが何もつっこんで聞こうとしなかったのがいけないんだけど、何一つ結局知ることはなかった。

僕はそれでもいっかと、そんな何かをふっ切ったような気持ちでいたんだけど、ヒロちゃんがここにきて爆弾を落とす。
「ああ。まあ、でもな知ってるか?ヤウリーアっていうのは、古い言葉で『神が眠る場所』っていう意味なんだ。」
「え!?」
『ヤウリーア』なんて、知らないって言ってたくせに何を言い出すのかと、僕はいやに得意げな顔をしているヒロちゃんを仰ぎ見た。
「もしかしたら、カイはご先祖様が従っていたという神の元にまだいるのかもしれないな。」
「それって、カイがエンディミアンってこと?でも、だったら、どうして?」
世界には唯一神である白き神しかいないはずで、その神がいるのは天使たちが神を奉(たてまつ)っている最後の楽園・天使の領域(フィリアラ・ディアス)。
そこにいられる人間は、最初に神に許しを請うたエンディミアン。
でも、エンディミアンや天使たちにとって、この不浄の大地(ディス・エンガッド)は穢

れた罪の象徴のはずだ。
ここに来ることは、神に禁止されているって、ヒロちゃんが言ってたことのはずだ。
「別にそうと決めつけるなよ。ヤウリーアって名前に意味があるとは限らんだろ？」
自分で勝手に僕に疑問を湧かせていおいて、この大人は意地悪く笑うのだ。

僕は頬をふくらませて、ヒロちゃんを見上げた。
「それを知ってたのに、カイにそれを聞かなかったの？」
「ああ。」
「どうしてさ？」
「もし、そうだと言われて面倒に巻き込まれるのが嫌だったから。」
そう言われて、呆気に取られた。
「・・・じゃあ、最初からカイの手伝いなんてしなきゃ良かったじゃん。」
「目の前で泣いている子供は放っておけんだろ？だが、その裏に隠れている面倒にわざわざ首を突っ込むまでは思わんだろ？」
「・・・意味分かんないし。」
本当、時々ヒロちゃんの変な理屈にはついていけない時がある。
僕は飄々(ひょうひょう)としたヒロちゃんに大きくため息をついた。
まあ、どっちにしたってカイがいなくなった今となっては、全部が謎のままだ。

「それに、カイも聞いてほしそうじゃなかったからなぁ。まあ、今度会った時にでも聞けばいいだろ。」
それは、また明日にでもカイと会えるような言い方だった。
もうカイとは会えないんじゃないかと神妙に彼と別れた僕は、ヒロちゃんのそんな気やすい言い方に最初に戸惑って、それから何だか嬉しくなった。

「・・・うん。そうだねっ！」
そっか。会おうと思えば、きっといつか会えるよね？
その時にカイに全部聞いちゃえばいいのか。
そう言われると、本当にカイにいつでも会えるような気になって、何だか落ち込んでいた気持ちが浮上してくるような気がした。（僕も単純だけど、そういう思考に辿りつけるヒロちゃんが一番単純だと僕は思う）

「じゃ、私たちも行くか。」
よっこらせと爺臭（じじくさ）く荷物を担いで、ヒロちゃんはいつものように僕に言った。
「何処にぃ？」
僕は聞く。実はこれもいつものやり取りだったりする。
ヒロちゃんは僕を振り向かずに、だだっ広いだけの不浄の大地（ディス・エンガッド）を見渡しながら、これまたいつも通りの言葉を発する。

「さあな。自由に気の向くまま。歩いていれば何処かに着くだろう。」

本当にカイと会う前と全く変わらないヒロちゃんの背中がそこにある。
僕はそれが嬉しくて、その背中の後に続く。
すると、ヒロちゃんが僕に荷物を一つ差し出してくる。
「ホレ、お前も荷物を持て。お前を担いで一週間も歩いたせいで、腰が痛いんだよ。」
「年寄り臭いよぉ？」
「お前よりは年寄りだよ。」
「ぶー。ヘリクツー。」
「何ぃ？」
とりとめのない、下らない会話をしながら、僕らは荒地を歩いて

いく。
また、いつもと変わらない、平凡で退屈だけど、やっぱりこれが一番な毎日が始まった。
僕はこの時、これが永遠に続けばいいなと思っていた。

・・・それこそ、僕が最期を迎えるその瞬間まで、ずっと。

この時の僕が知るよしもないのだけど、僕はこれから一年後ヒロちゃんの前から消えることとなる。結局、カイと再び会うことはなかった。
その話はここでする必要がない話だけど、僕が最期の時までただヒロちゃんと一緒にいたいという想いを抱き続けていたことをここに追記しておく。
そして、これは、僕が最期の時まで知ることのない事実だけれど、もう一つ。
僕たちがカイと訪れた呪われた街・ファシジュの都。

その場所は、もう存在していない。

それは誰も住んでいない幽霊街（ゴーストタウン）だとか、そういうレベルではない。
あの街は全てが消滅したんだ。
確かに存在したはずのあの街は、まるで何かに抉（えぐ）り取られたかのように街全体が建物も跡形もなく、まるで初めからそこに存在していなかったのように、あの場所には大きな穴だけがぽっかりとあるだけだということを、最後にここに記しておく。（まあ、本当なら

僕も知らないことなんだけどね）

さて、どうして呪われた街はなくなったんだろう？

最終話　いつか迎える最期の日まで。（後書き）

今度こそ『異邦の少年　亡国の遺産』第十三話にて完結です！ここまで読んでいただいた、本当に奇特な読者様。涙が出るほど感謝です！！（多分１０人前後くらいしかリアルタイムで読んで頂いている方はいないので、そこの貴方は本当にレアな読者様です（笑））

この話、『東方の天使　西方の旅人』という話の番外編として始まったんですが（多分、そちらを読んでいる方がほとんどだと思います）、試験的な形で始めた上にかなりの見切り発進だったので、実は最初考えていた話とはかなり違ってきています。（本当はこんなことじゃ、駄目なんですが）

最初はほのぼの～としたエヴァとカイの友情物語にしようと思っていたんです。更に本編とのリンクもほとんど皆無にしようと思っていたんです。なのに、気が付いてみると多分本編を呼んでなくても理解はしてもらえると思うんですが、本編との関連部分もかなり多くなり、更に実は何がとは言いませんが今後の物語に大きく関わる部分もあったりするんです。

カイも最初は本当に子供子供していて軽い登場人物だったんですが、気がつくと・・・多分、いつか本編の方にも登場するような人物にまで成長していました。いつか、エヴァに代わって彼と再会できる日を是非楽しみにしていてください。

ともかく、そんな稚拙としか言えないような作品で、お目汚しになってしまったと思うので大変申し訳ない気持でいっぱいですが、ここまで読んでくださった数少ない皆様。是非、感想やご指摘を頂けると嬉しいです。特に本編も読んでくださっている方は、番外編についてどう思ったかなど意見を聞かせていただけると嬉しいです。（実は登場人物が本編の方は多いんですが、主人公たちの一人称なので色々番外編の構想自体はあります。なので例えばこの人視点の

話を読んでみたいとか、または番外自体をやらない方がいいのでは？など）本編を呼んでここまで来てくれた方は、中々コアな読者様だと思うので、是非ご意見を伺いたいです（笑）後、結局色々謎が残る話となってしまいましたが、質問等にも答えれる限り答えたいと思ってますのでどうぞ併せてお願いします。もちろん、本編なんか知らねーよという方の感想もお待ちしております。では、本当にこんな所まで読んで頂いてありがとうございました！

ここから本編のネタばれになるので、そっちを読んでない人で本編も読んでみようかな？という人は避けた方がいい後書きです。（そんな人は、中々いないと思うのですが（笑））

お気づきの方も多いでしょうが、ディルヴァ・トゥ・マジスは黒（カ）の武器（シュケルノ）です。要するに、ニールティアーもカイもヒロと同じく黒の一族。すなわち、呪われた街を訪れ、彼女とカイのご先祖様が従っていた神とは、この時のヒロたちは分かっていないですが白き神ではなく、黒き神ということになります。

「ふーん」という感じかもしれませんが、そんな裏設定もここで少しお知らせして、では長くなりましたが、本当にこんな所まで読んで頂いてありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5870c/

異邦の少年　亡国の遺産

2010年10月9日04時28分発行